

ぶどうの木

第 32 号 (2007年 2月発行)



基督伝道隊

八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

目次

巻頭言

榎本和義 牧師 1

特集「私の受洗」

バプテスマ式でのあかし

木田徳次郎(前田) 2

信仰告白

海江田博子(前田) 4

洗礼を受けるに当たって

矢野 康子(大濠) 5

信仰告白

林 スズ子(前田) 6

私が受洗に至るまで

高木ツルエ(前田) 7

救われた喜び

上田喜美代(前田) 9

私が受洗したとき

鈴木 一幹(前田) 13

幼児期から受洗まで

貞 サユリ(前田) 14

受洗に導かれるまで

正野 眞宏(前田) 16

受洗の恵み

林 由記子(前田) 21

洗礼までの道すじ

本部 琢己(大濠) 25

柿

詩「別れの日々」

首藤 正(前田) 27

お証し(新しい教会に導かれて)

伊規須太郎(戸畑) 28

主に導かれて

井田 修二(大濠) 31
井田れい子(大濠) 34

久住登山

尼田 隆己(前田) 36

詩「信仰と時の流れ」

岩崎 弘(大濠) 41

息子のたびだち

正野 眞宏(前田) 42

詩「青空」

淵田 桃代(前田) 44

お証し

三好 翠(前田) 44

わが思い出(台湾編二)

鈴木 一幹(前田) 46

八幡前田教会年末感謝会

58

八幡前田教会年表(平成十年〜十八年)

76

編集後記

巻 頭 言

榎 本 和 義 牧 師

「新しい歌を主にむかつてうたえ。全地よ、主にむかつてうたえ。主にむかつて歌い、そのみ名をほめよ。日ごとにその救を宣べ伝えよ」(詩篇九六・一〜二)

『ぶどうの木』は、私たちの信仰を告白する証しであり、神様のご愛と恵みを証言するものです。それはまた、主を褒め称える讃美でもあります。

聖書には、「人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである」(ローマ十・十)とあります。神様から戴いた救い、恵み、愛を、心に感謝しつつ秘めておくだけでは、それを自分のものとすることができません。「態度で示す」と、口に出して主を讃美し、褒め称え、主がこのようにして下さったと言いつき、主はそのように私たちの心を変えて下さいます。

前回発行してから、しばらく間があきましたが、今回も感

謝・讃美のてんこ盛りです。主の恵みは、投稿して下さった方々ばかりではなく、読んで共に感謝・讃美する私たちにも及びます。どうぞ、心から主を褒め称えて、その恵みを溢れるばかりにくみ取って下さい。



特集「私の受洗」

バプテスマ式でのあかし

木 田 徳 次 郎（前田）

私の父は、まじめな新日鉄の工員でしたが、昭和二十年八月六日の八幡の空襲で、家と家具の一式を失い、働く意欲をなくしてしまった時に、私が八月二五日に佐世保から復員してきたので、退社を決意して、自分の兄弟のいる出身地の宇和島市に、弟や妹を連れて帰りました。

しかし、何年も経たないうちに、胃癌で六十歳を越えることもなく、亡くなりました。

母は当時、お寺を創設された真宗のお寺の住職に師事し、毎日のようにお寺にお参りしていました。その間、子供は子供同士で助け合って、生活をしていました。

母が亡くなりました時、お寺に知らせたところ、住職から「葬儀はうちでします」と言われて、母の姉弟も出席して、お寺の本堂でさせていただきました。

小学校六年の時に、八幡中学受験のため、担任の藤井勇先生が熱心に受験指導をしていただき、毎夜二時頃まで勉強しました。その間、友達同士の競争心は激しく燃え、満点を取って合格と考えるようになっていきました。

試験では「酸性・アルカリ性のリトマス試験紙」の反応で、赤か青か迷って、エンピツを転がして見ましたが、はつきりしませんでした。後から尋ねたところ、「梅干しは赤くなる」と教えていただいた。今でも忘れませんし、受け持った子供には、はつきりと教えました。

試験の結果は見に行きませんでした。饅頭を買いに行ったら、お店のおばさんから「おめでとう」と言われて、新聞を見せてもらって合格を知りました。昼から合格発表を見に行きました。

母親が、私を中学校に入れたのは、母の姉と弟が教員をしていたので、私にも教員にならせるためでした。

その後、小倉師範に入学し、昭和十六年に花尾高等小学校に奉職して、教員生活のスタートを切り、途中昭和十八年から二年半、海軍に現役として入団し、マリアナ沖海戦、レイテ海戦に参加しました。

二十年八月の終戦と同時に、警察官と教員が一番先に復員しました。八月二六日、休み中でしたが、花尾校に行きまし

たが、久しぶりに先生方に会い、大変うれしく思いました。再び教員生活のスタートを切りました。教員生活三九年間を一生懸命に努力しました。教員生活で思い残すこともなく、大変幸せだったと思います。

昭和二一年に結婚し、「お互いに自由を尊重して暮らして行く」と誓い合い、私は子供の教育に専心しました。家事の事や信仰の事は家内に任せきりで、何の心配もなくしてもらったお陰で、良い女房だったと感謝しています。これも我らの主のお陰だったと今思つて、心から感謝いたしています。

平成六年、秋の叙勲で受賞の栄に浴しましたが、宮中に参内して鳳凰の間で天皇陛下に拝謁の栄を賜りました。家内は着物を着るのを大変いやがつて、一時は「行かない」とまで言つていたが、ドレスでも良いと書いてあつたので、ドレスで参加させてもらおうということになり、夫婦揃つて参内出来ましたことは、大変良かったと思つています。

彼女がキリスト教前田教会榎本利三郎牧師のご指導を受けて、バプテスマを受けさせていただき、主の恵みを受け、神の子として召天することが出来ました。彼女の生きざまを見て、私もそのようになりたいと思うようになりました。遺言書を担当の外科部長から戴いた時には、大変驚きました。

考えてみますと、入院する時に「主にすべてをお任せします」とよく言つていたので、実行したのだなあと思いました。

私としてはこの遺言を守ることが、夫婦愛の確認であると共に、今後の自分の生きる道だと確信致しました。

教会の日曜礼拝に出席させていただき、皆様方と一緒に研修に努めさせていただき、自分の信仰の心を磨き、感謝の心を実践して行きたいと思つています。

しかし、信仰ということ、神様を信じることですが、説教を拝読して信じるということをやコブの手紙によると、「信仰は行いを伴わないならば無意味である」とありますように、実際に行わなければいけないと分かりました。今後は少しでも実行して行くように、努めて参りたいと思ひます。しかし、信仰の足りなさや服従の足りなさのため、主の御旨に背くことがありますたら、哀れみもちまして、お許しくださいますようお願いいたします。

本日のバプテスマにより、御子の十字架の贖いを信じ、主の霊を私の心の中に注ぎこんでいただき、新しい心に作り変えてください。そして、悔い改めにふさわしい実を結ぶように、力づけてくださいますようお願いいたします。

(平成十七年九月二五日受洗)

信仰告白

海江田 博 子（前田）

昭和三七年に結婚が決まり、初めて海江田家を訪ねた時、会食の席で、まず両親と兄夫婦が神様にお祈りを始められたのを見て、びつくりしたことを、今も鮮明に思い出します。私の育ったこれまでの環境と異なり、こんな家庭もあるのだと思いました。

結婚式も、前田教会でお世話になりました。長男が生まれ、夫がペテロ第一の手紙第三章一〇〜一一節の「いのちを愛し、さいわいな日々を過ごそうと願う人は、舌を制して悪を言わず、くちびるを閉じて偽りを語らず、悪を避けて善を行い、平和を求めて、これを追え」という御言から「善」の字を戴き、善夫と命名したと、アルバムに力強く書いています。

夫が五五歳で召された時、利三郎先生から天国へのお導きいただきました。その時の先生のお言葉や姉達の姿を見て、これからの人生を信者として歩む決心をしました。それから少しでも理解できればと、できる限り教会に行くようになりました。

そして平成十七年九月、大濠公園教会でバプテスマを受けさせていただきました。信者の皆様と共に、敬虔な祈りの中の洗礼式に、とても感動いたしました。

まだまだ何も分からない私ですが、これからは皆様のお仲間に入れていただけるようになればと思っております。

（平成十七年九月二五日受洗）



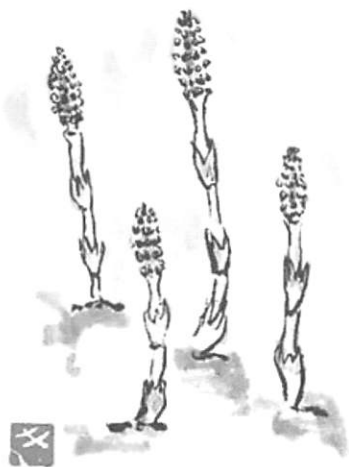
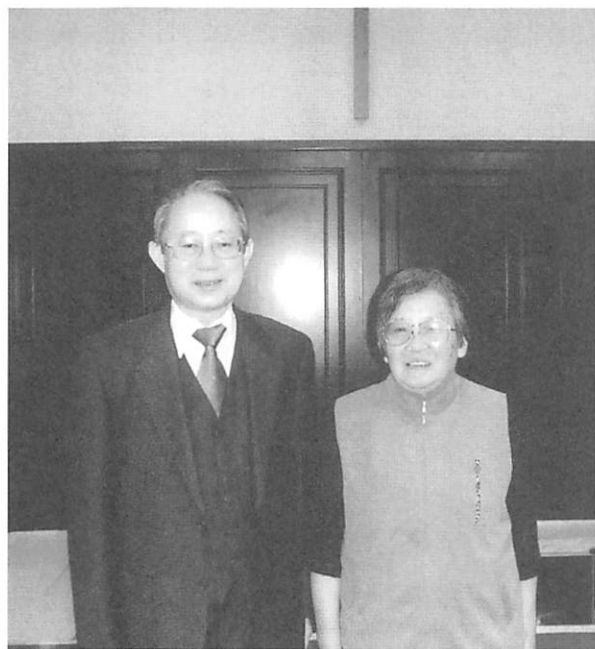
洗礼を受けるに当たって

矢野康子（大濠）

平成十二年の五月に、病院で典型的な鬱病と診断され、良くなったり悪くなったりでしたが、近頃、病状も軽くなってきたようでした。しかし、この九月のうつ状態は私の薬の飲み方が悪かったようで、症状がひどく、入院することになりました。毎日、主人が面会に来てくれて、そのとき、聖書と『日々の光』（普段、良い時に毎朝読んでいたもの）を持って来てくれました。最初は気分悪く読む気になれませんでした。が、一週間くらい経つと、元気が出て来て読むことが出来るようになり、退院したら、なるだけ早く是非洗礼を受けようと思うようになりました。

これからは神様を信じて、イエス様を救い主と信じて参ります。榎本先生や姉妹方、皆様のお祈りのお陰だと感謝しています。また、神様に大変感謝しています。

（平成十七年十一月十三日洗礼式にて）



信仰告白

林 スズ子（前田）

私はキリスト教には馴染みがなく、私の家は仏教でした。それも特に熱心にはしていなかったわけでもなく、私自身、関心もありませんでした。

私は長崎県の出身で、高校卒業後、福岡市に出てきました。その頃、今の主人と出逢い、北九州へと導かれたのです。

それから間もなくして、教会へと導かれたのですが、最初はあまり気が進まなかったのです。彼は熱心なクリスチャンでもありますから、信仰の話しをいつもしてきてくれたので、私は教会へ行ってみようかと思ひ、教会を訪れました。教会へ行ったのはこの時が初めてで、何も分からず、毎週礼拝には出ていましたが、ただ何となく足を運ぶだけでした。

私は今まで、神様を知らずに生きてきました。様々な困難な中に置かれ、辛い事もありましたが、いつも周りの人達に支えられ、自分でもある程度は乗り越えてきたつもりですし、神様に頼らなくても、という思いがありました。

しかし、そんな私が主人と一緒に仕事をするようになり、

目に見える状況はあまりにも悪いもので、いつも不安が心に入り、これから先も、いつもこんな不安の中に置かれるかと思ふと、逃げ出したくなつた時もありました。そんな中、いつも御言を与えてくださり、強めてくださったのです。

「あなたがたは心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」(ヨハネ十四・一)という御言でした。そして病氣になつた時も、辛い宣告を受け、どうして私が……という思いをした時にも、御言を思い起こさせてくださいました。

仕事の上では、特に様々な御業を見せていただき、私の頑なな心は砕かれてゆき、信じて行きたいと思うようになって来ました。

イエス様が、「わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」と言われたように、自分では何もできない者だと、素直に認めざるを得なくなりました。

それから、私は受洗を考へるようになったのですが、なかなか一步を踏み出すことができず、迷っていました。が、「あなたは、わたしに従つてきなさい」(ヨハネ二一・二二)との御言が与えられ、そしてまた、私のような者を神様が捕らえてくださり、「あなたは私のものだ」と言つてくださっている神様の深い御愛を知り、今回迷ふことなく、受洗を受けさせてい

ただくことにしました。

これから先、どんな辛い状況に置かれても、神様を信じ、お従いして行きたいと思います。

神様の深い御愛、そして皆様方のお祈りを心より感謝いたします。

(平成十八年六月二十五日受洗)



私が受洗に至るまで

高木 ツルエ (前田)

小学校二年生の秋の時です。

当時、両親は一町歩の田んぼを作り、子供六人を育てていました。田舎の秋は、猫の手でも借りたいほど忙しい時期です。秋の取り入れは済みましたが、麦を蒔くために使う馬小屋の堆肥を、夕方、父が二頭の馬で運んでおりました。その時、私が大事な宿題をしようとしたら、鉛筆がないから買って欲しいとせがんだのです。父は仕事がこれで終わるので、帰ってきたらすぐ買ってあげるから待っていなさいと言ったのですが、私が今でなければ駄目だと言い張り、父を怒らせてしまいました。

私は言い出したら聞かない所があつて、近所の人は、新道のツルちゃんは男の子だったら良かったのに、と言われておりました。私があまりに聞き訳がないので、父は馬の手綱で私の足を、ピシッ!と叩いたのです。その飛び上がるほどの痛みと、これまで一度も子供を叩いたことのない父の愛の鞭に愕然とし、ただ父に申し訳のない事をしたという思いでう

なだれ、涙が溢れました。しかし、その出来事は私の生涯を変え、一つの転機となりました。

母は日中、農作業で忙しいので、夕食の後は足袋を作ったり、動きの激しい子供達の衣類を繕ったりしておりました。そんな時、私達に何か用事を言いつけてもすぐしないと、横に置いてあつた物差しで、ピシャー！とやられたものでした。

父と母とでは、愛情の表現は違つておりましたが、あの時の言葉にならない愛の鞭が身にしみて、これからは決して父を悲しませるような事はしまいと心に決めましたが、現実の歩みは、決心したようにはできませんでした。

そして、私は何という情けない者だろうかと心を痛め、悩んでいました。学年が進むにつれ、進学の事などでも、私が以前と少し違つた子供になりつつあることは、父にとつては嬉しいけど、一方では気になっていたと思います。

その頃、近所に東京から村の郵便局に來られた若いご夫婦がおられました。ご主人は隣村の方で、東京に出て苦学し、奥さんは北海道の遺愛女学院出身で、近くの町の小学校に勤めておられました。私がい物を頼まれて、学校から帰つて來るまでに買つておいて上げますと、喜んでくださいました。

その奥さんはクリスチャンで、私が父に対する思いを話しては、何回決心しても決心どおりの歩みができず、子供心に

悩んでいることを打ち明けたところ、その時、自分の信じる神様とイエス様のことを話してくださり、聖書の「わたしは何という惨めな人間なのだろう……」(ローマ七・二四〜二五)のお言葉を示して、決心してもできない人はあなただけではありませんよ、でも、神様を信じ、イエス様の名によつて神様にお祈りすれば、神様が力を与えてくださるので、できるようになりますよ、と励ましてくださいましたので、私もその神様とイエス様を信じ、父を悲しませる生活より、父を喜ばせる歩みができたらしいなあ……と、希望が与えられました。

その後、ご夫婦のお世話で、同じ郵便局に勤めるようになり、私を誘つて近くの東飯田伝道所に連れて行つてくださいました。

この伝道所は、八幡製鉄所に勤務されていた大田幹夫さんの奥様大田セイさんが、戦時中に子供を連れて郷里に帰られ、私の家の近くに新築した自宅で、由布院教会の秋山先生をお迎えし、近所の方のために集会を持たれていたのです。

私もその集会で、万物の創造者である真の神様と、私の罪のために十字架にかかり、罪を贖つてくださったイエス様を信じさせていただきました。

そして昭和二六年三月二五日、バプテスマの恵みに預かり、靈肉共に新しい出発をさせていただきました。

救われた喜び

上 田 喜美代 (前田)

〈私の救いと受洗〉

「伝道者は言う、『空の空、いつさいは空である』と」

(伝道の書 十二・八)

と聖書にあるように、私も二男一女の三人の子育ても終り、私も主人も定年を迎え、何をするにも毎日が怠惰な張りのない、感謝のない日々でした。

このような日々を五年、十年と繰り返すのかと思つた時に、何と空しいものか、本当の生き甲斐とは、と渴き求めたとき、三浦綾子さんや遠藤周作さんの作品に巡り合いました。また娘に誘われるままに教会に導かれました。

聖書も与えられ、F E B Cから流れるお話をも聞いているうちに、私の求めていたものはこの福音だと気が付きました。でも悟るだけでは、聖書の入り口も見出すことはできません。

「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ 三・三)

「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない」(ヨハネ 三・五)

「彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ 一・十二) これらの御言を与えられてから、早や三年が経ちました。

主人は「受洗するなら離婚するぞ」とまで言っていました。が、遂に真実なる神様は、私の祈りに、また皆様の執り成しの祈りに答えて下さり、主人の頑なな心を開いて下さり、一九九三年五月三日に受洗のお恵みにあずかりました。

大蔵川上流で洗礼を受けましたが、家に帰ると、あれほど反対していた主人がお風呂をたてて待っていてくれました。湯舟につかっていると、とめどなく涙が溢れて止まりませんでした。今でも思い出すたびに涙が溢れます。

「今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」(ローマ 八・一)

「どんな被造物もわたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである」

(ローマ 八・三九)

このように神様のお恵みを受けて、有頂天になっていましたが、受洗の二日後に試練が待ち受けていました。

〈義母との触れ合い〉

それは、主人の兄嫁の脳腫瘍による死亡、半月もせぬうちに、その夫である義兄の前立腺癌の手術です。一年後召されました。八八歳の痴呆症の母が残されました。

今では施設もありますが、当時は人に知られないようにと義兄は隠していました。

毎朝やさしくし、仕えることができるようにとまず祈って接しますが、夕方になると己が出てきます。しかし、おばあちゃんに優しくできると、その分主人が私に優しくしてくれます。

初めの頃は用便がうまく出来なかったのが、最近は上手にできるようになり、主人がどうしてよくなったのかと不思議そうにしていますので、「優しくしてあげましょう。精神的なものですから」と励ましあっています。

昔の事を懐かしく楽しそうにいろいろ話が尽きなく語ってくれます。九三歳まで、最後に共に生活できましたことがなると幸いなことでしょう。神様の憐れみですね。

〈突然の息子との別れ〉

その後、一九九八年十二月最後の金曜日に、「肺炎もだいぶ良くなり、日曜日には退院予定で、いったん月曜日に出勤

して後、ゆっくり休養を取るから、お正月は里帰りせず、久し振りに自宅で過す予定です」と、息子の妻の紅霞さんから電話を受けたばかりで安心していましたが、

「お母さん、ゴメンね。彼の容態が急変したからすぐに来てね」との知らせにびっくり。大阪に駆けつけた時は、冷たくなっていました。明け方、持病の喘息の発作が起こり、それが引き金となつたらしい。肺炎を患っている時に喘息の発作が起こると、非常に危険な状態だと説明される。本人が点滴を拒否したらしい。さぞかし苦しかったことだろうか、胸が痛くなる。

「何故？ なぜ？ なぜ？」。

平安がない。聖書も目に入らない。祈りにもならない。私も三八度四分の熱が下がらない。暗黒の淵に落とされたようだ。そんな時、教会の大田姉から新年聖会のテープを届けていただいた。初めての今年の聖句、

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい」(ヨハネ 十五・九)

そうだ、神様はご自分のひとり子イエス様を犠牲にして、この私の罪のために十字架にかけられたのだ。いま自分の息子が御国に召されたことと重ねて思うときに、はっと、我に

返り、自分の罪を悔い改めて、感謝の祈りを捧げました。御言が砂に水が染み込むように、私の魂に届きました。日毎に熱も下がり、平安が与えられましたことが、何と感謝なことでしょう。

「わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけない。

主に責められるとき、弱り果ててはならない。

主は愛する者を訓練し、受けいれるすべての子を、

むち打たれるのである。――

すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、

むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、

それによつて鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるよう

になる」(ヘブル 十二・五―十一)

四九日の法事がすんで、やっと教会に行くことが許される。

感謝！

「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。

主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」

(ヨブ 一・二二)

これらの御言は、頭の中では分かる。しかし正直なところ、五ヶ月たった今、こうして写真を見るたびに、元気盛りの四

十歳で退院予定がなぜ急死なのか、何か手立てはなかったのかと思うとき、なぜ？ なぜ？と神様につぶやいている。

「わが魂はもだしてただ神を待つ。

わが救は神から来る

神こそわが岩、わが救、

わが高きやくらである。

わたしはいたく動かされることはない。

(詩篇 六二・一―二)

わが救とわが誉とは神にある。

神はわが力の岩、わが避け所である。

民よ、いかなる時にも神に信頼せよ。

そのみ前にあなたがたの心を注ぎ出せ。

神はわれらの避け所である」(同 六二・七―八)

つぶやきの一切を悔い改め、神様に委ねたときに、神様は

避け所となつて、平安をお与え下さいました。

〈神の護り〉

それから二年後の二〇〇〇年二月十七日に、主人が岸壁に釣りに行った時に、車のブレーキとアクセルを間違つて車ごと海に転落しましたが、危機一髪、神様から護られ、助けられました。

神様がご自身を現して、まだ目が覚めないのかと、主人をも御救いに預からせよとの神様のご忍耐を、今思います。

〈娘との別れ〉

次男の哲義は三二年前、九歳の時に池に足を滑らせて、還らぬ人となりました。

一人残された娘がやはり四十歳でした。三年生の女の子を残して召されました。Domestic Violence 激しい虐待を受けていましたので、離婚をすすめていましたが、娘は子供のためにと祈って、敢えて耐えていました。

二〇〇一年十月二三日、電話が入り、急遽東京に駆けつけた時は、東京女子医大病院の遺体安置室でした。すべて自殺で片付けられていました。東京での滞在中の一週間、何をしたのか、自分でも分からない状態でした。

帰宅後 落ち着いていろいろ考えると、不審な点ばかり。先代の牧師先生に相談しましたら、「人の生死に関することは、神様の領分を侵すことになる」と言われました。

その後 彼とコンタクトが取れません。

〈主人の受洗〉

このこと以来、主人もただ神様を信じたい、救われたいと

決心して、まずお寺に納骨している息子たちの遺骨を貰い、縁を切りました。そして牧師館を訪ねて、お導きを仰ぎました。二〇〇二年十月十四日、受洗のお恵みに預かりました。子供たちが一粒の麦となって、子供たちの犠牲の上に、今私たち夫婦が御救いに預かり、幸いな日々を送らせていただいています。

神様は事毎に「わたしだよ」とご自身を示してくださいっているのに、頑なな心には、心の目が開かれずに悩み苦しんでいました。

「シオンよ、恐れるな。

あなたの手を弱々しくたれるな。

あなたの神、主はあなたのうちにいまし、

勇士であつて、勝利を与えられる。

彼はあなたのために喜び樂しみ、

その愛によつてあなたを新にし、

祭の日のようにあなたのために喜び呼ばわれる」

(ゼバニヤ書 三・十六〜十七)

懇ろに顧みてくださる神様に、ただただ感謝あるのみです。

〈今日あるはただ神の恵みなり〉

「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人

は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとつて下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである。』。

すると、御座にいますかたが言われた、『見よ、わたしはすべてのものを新たにする』。また言われた、『書きしるせ。これらの言葉は、信すべきであり、まことである』。そして、わたしに仰せられた、『事はすでに成った。わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終りである。かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう。』。

(ヨハネの黙示録 二十一・三〜六)

今は亡き愛する子どもたちは、教会の牧師先生を初め兄弟姉妹たちの懇ろな祷告の祈りによって、神様の御手の中にいだかれています。やがては私達夫婦も共にこの神の幕屋にて会いまみえる望みをもって、この信仰に励んでいます。イエス様にお出会いしていなかったら、どんなに悲嘆に満ちた人生でしょう。

しかし今は、共に歩いて下さるイエス様が私達の中にいて下さいます。なんと大きなお恵み、平安でしょうか。ただすべてを捧げて、お従いしたいと願ってやみません。

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」(ヘブル 十三・八)

ハレルヤ アーメン！



私が受洗したとき

鈴木 一 幹 (前田)

私は大正十四年五月七日生まれで、行橋市行事の祖父母と母の一家に生まれ、一家で行橋市行事のメソジスト教会に行っていました。したがって、私が生まれて百日目に、同教会で幼児洗礼を受けたとの事でした。その後、軍隊から召集令状が到着し、当時の行橋教会の湯浅牧師より、入隊前の洗礼を受けました。

幼児期から受洗まで

貞 サユリ（前田）

私の幼児期は、父母の愛と祈りがなければ生きて行けず、とつくの昔に、空のかなたに消えていたでしょう。幼児期に残る記憶は、薄茶色の天井と鼻ひげに黒縁めがねのお医者さんの顔、部屋の隅に転がっていた酸素ボンベ。外出はおんぶか抱っこ、母の後足と黒っぽい着物が印象に残っています。

小学校に上がって、足が弱くてよく転んでいました。運動会は、いつもビリ。小学生の頃、兄と姉（父の連れ子）と私の三人で、日曜学校に通っていました。兄が竹を二つ割にし、鼻緒をつけ、三十センチほどの下駄を作り、雪道を歩いた記憶があります。

上学年から中学に入った頃、兄と姉はいませんでした。兄は八幡工業高校を卒業して若松の機関区に就職し、姉は父の姉の所へ養女として貰われて行きました。

今思い出すことは、父母が膝を突き合わせてお祈りしていた姿、また、よく賛美をしていました。私は歌をすぐに覚え、いつも歌っていました。

中学卒業後、私は非常に悩み苦しみました。（この頃、竹下町から東鉄町に引越しました。）隣りが教会でしたので、教会に入り浸り、お手伝いをしたり、牧師夫人と話したり（昨年九十歳で亡くなりました）、讃美歌を歌ったり、それが何よりも楽しみでした。オルガンが好きで、よく弾かせてもらいました。私が両手で弾くと、「サユリちゃんは習っているの」と聞かれ、「とんでもない、ただ楽譜を見て弾いていただけです」。真つ先に覚えた曲は讃美歌三二〇番「静けき祈りの時はいと楽し」でした。勉強したいのですが、経済的に無理でした。父は製鉄所に勤めていました。夕方、父が帰るとすぐに畑仕事をしていましたので、私は自発的に手伝いました。肥え汲み、虫取り、草取りなど、いろいろな手伝いました。妹と弟が次々生まれ、子守、遊び相手、その傍ら教会に行くのが楽しくてなりませんでした。

中学を卒業しても、病弱のために仕事もなく、家事の手伝いをし、母が仕事に生まれました。豆腐屋さんでした。朝四時に家を出て、歩いて二十分ほどの所（昭和町）でした。家を出る直前、私の寝床に来て耳元で、「サユリ、行ってくるよ」と言ってお出かけるのです。私は五時過ぎに起きてご飯を炊き、家事一切を引き受け、父と妹弟を仕事や学校へ送り出していました。信者さんのお世話で働いたこともありましたが、続き

ません。結局、家事をしながら、聖書を読み、賛美したり、家の壁を眺めてオルガンがある……空想していました。

ある時、天幕伝道がありました。七条から槻田方面に行く途中の左側の空き地に天幕を張り、私は後ろの入口で、入場者にトラクトを配っていました。どの位の人数が見当がつかせませんが、結構大勢いたような気がします。私は後ろの隅に座っていました。お証や賛美が、順序に沿って進行していました。突然、牧師夫人から、「サユリちゃん、チョット来なさい」と言われて、私はびっくりして、「何で！」と思いつつ前に出ました。「さあ、これを歌うのよ」。ぶつつけ本番です。聖歌七〇七番(エスに話せ)「私、ソプラノ歌うから、貴女はアルトを歌って」。私はチャント歌えて、本当に嬉しかったです。精神的(義父)、身体的(病弱)、経済的(貧乏)に行き詰まりを感じ、生きて行く自信をなくしてしまいましたが、でも、牧師先生を始め、夫人がいつも私のために祈ってくださいました。膝をつき合わせて……ではなく、夫人と私の二人、横にびったり寄り添い、肩を抱き、涙を流しながら祈ってくださいました。その時のスキンシップ、母性愛、神の愛を深く感じました。こんな惨めな私を、こんなに愛してくださいさる方がいらっしやる。「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださいさった」。感激の涙が溢れ、愛に包まれ、身も

心も、ただ神様に委ね、仕えて行こうと決心しました。

昭和二八年のクリスマスに、受洗しました。喜びと感謝で一杯の日々を過ごしていました。

ある時、夫人が、「サユリちゃん、献身しなさい」と言われました。でも、献身とは自発的な決意であり、私はどうしても踏み込む自信がありませんでした。体力はなし、学問も知識もなし、身分不相応であることを自覚しました。

「もはや我生くるにあらず、キリストわが内にありて生くるなり」の御言が、どうしても理解できませんでした。

今、私は岸壁に立って海を眺め、飛び込もうとしている。でも、私は泳げない。ブクブクと沈み、死んでしまう。でも死んだら、海底にすばらしい世界があり、命の水を飲み、想像以上の楽しい人生が待っている(これは空想論です)。

まだまだ自分の信仰の弱さ、自分を捨てて飛び込む勇氣がありませんでした。でも教会に行くのが楽しくて、嬉しくて、よく励んでおりました。

過去を振り返ると、いろいろ苦しい事や辛く悲しい事ばかりでした。でも、主がいつも共にいてくださり、助け主なる主が御言で慰め、強めてくださいます。幼児期から入信し、私の四分の一の人生を綴らせていただきました。いつも共にいてくださる主、「我、汝を捨てじ」とのお言葉の通りです。

霊感賦 二六番

今にいたるこそ 主の恵みなれ
守りの御手をば など疑うべき
いかなる折にも 愛なる神は
すべての事をば よきになし給う



昭和28年12月受洗時のサユリ姉(前2列左2人目)
2列右3人目萩原アサヨ姉(恵子姉、潤子姉の顔も)

受洗に導かれるまで

正 野 眞 宏(前田)

〈弟の死〉

私が受洗に導かれるまでとなると、中学二年生の時まで遊ばなければならぬ。それはその頃から、母が教会へ行き出したからである。

その頃のわが家は、戦後、事情があつて大分県から祖父の住む宗像郡東郷町(現宗像市)に引っ越し、祖父の家の離れ、と言うより納屋のような家に住んでいた。そして向かいの薬局のご主人が熱心なクリスチャンで、母はその方から聖書の話聞くようになり、津屋崎教会へ行くようになった(この辺の事は母の記念誌「神は愛なり」に詳しい)。私達子供は、東郷の大和兄(宗像高校の教師)宅で、津屋崎教会から宣教師が来て日曜学校を開いていたので、そこへ行くことになった。

母の入信後しばらくして、三男の弘己が三歳で召天した。その召される時、「イエス様が迎えに来たから、僕行くよ。お母ちゃん、さようなら、お兄ちゃん、さようなら」と、見事に天国を証したのを目のあたりにして、子供心にも天国は必ずあること、そしてイエス様を信じて、天国で弘己ちゃんに

会おうというというのが、わが家の合言葉のようになった。

弘己の召天は、私がこれまで信仰から離れることなく守られた第一の事である。高校生となり、また社会人となってこの世に染まりやすく、時として不信仰に陥った時、ふと弟の事を思い起こし、恥ずかしくなつて、「弘己ちゃん御免ね、お兄ちゃん間違つた方向へ行つていた」と立ち返らせていただいたことが何度もある。

その後、東郷にも教会が設立され、私達は東郷教会へ行くようになった。しかし、新しく着任された若い牧師は、聖書の解き明かしが、時事問題の解説か分からないような説教であつたため、自分でお祈りはしていたが、十字架の意味も、信仰の何たるかも分からずにいた。

〈八幡前田教会へ〉

信仰的にもこのような状態であり、また経済的にも食料品店が行き詰まるようになったわが家を、主は不思議な御手をもつて黒崎へ導き、一般食堂を開業するようになった。この事で八幡前田教会へと導かれたのである。昭和三四年七月のことである。

度々お証しているように、初めて榎本先生の説教を聴いて、ここは他所と明らかに違う、何よりも神の臨在を強く感じたのである。

これまで罪や十字架の事はあまり聞いたことはなかったが、ここでは毎回罪の話が出てくる。私は苦しくなつた。頭では理解できても、現実、自分が罪人であるという意識は、罪はあつてもそんなに悪くないというもので、ましてや罪人の頭という自覚はなかった。しかし、お話を聞いているうちに、罪の問題が解決しない限り、本当の信仰に至らない事を知り、自分の真相を主に教えてもらわねば、と思うようになった。

〈神との対決〉

ある日の夜、それは昭和三五年十二月十四日の事である。私は心を定めて、神と対決しようと思つた。それで店の食堂を閉めて家族が寝る頃、私は下の食堂に降り（家が狭くて自分の部屋はなかった）、今晩は神と出会うまでは寝ない覚悟で祈ることにした。それはヤコブがヤボクの渡して御使と組み討ちして、自分を祝福してくれるまでは去らせないと云つた、そんな思いであつた。

まず聖書を取り出してガラテヤ書二章を読み、罪について考え、これについて分からせて欲しいと祈つた。頭では分かつていても、実感が無い。本当に罪が分かつていないから、分からせてほしいと祈るが、何の反応もない。自分みたいな者が祈つても、神様は答えてくだらないのだろう、第一厚かまし過ぎる、そんな思いが湧く。いやいやこのままでは自

分は駄目になる、ここは叱られても、何と言われても、答えを得るまで求め続けなければならぬ、そのように自分を励ましながら、必死の思いで「神様、答えてください。耳を傾けてください」と叫ぶように求めた。

どれだけ時間がかかったかは知らないが、ふと子供の頃の事を思い出した(なぜそんな事を考えたのか分からない。神様が思いを導いて下さったとしか言いようがない)。それは小学何年生の時だったか覚えていないが、戦後間もない頃で、わが家は大分県東国東郡櫛来村と言う小さな村に疎開していた。どこの家でもそうだったように、食糧確保のために家で鶏を飼っていた。その世話をするのが私の役割だったのだが、朝は学校へ行く前に餌を与えなければならぬところを、生来のサボりで、庭が広いのを幸い鶏小屋の戸を開け放ち、自助努力で餌を確保させるというやり方をやっていた。それでも夕方になると、草を採ってそれを切り、糠を混ぜた餌を持って、「コーコーコー」と呼ぶと、あちこちから鶏共が集まってくる。それらを引き連れて小屋に入れ、餌を食べさせる。そしてあちこちに産み散らかした卵を拾ってくるという具合である。まことにイエス様が言われた「良き羊飼」とは大違いの、いい加減な飼い主だった。事実、何度も鶏がイタチにやられても、この飼い主は何ら手も打たなかった。

それでも、日曜日などは鶏共と戯れるのが、けっこう楽しかった。私が思い出したのは、この時の事である。

ある日、私はうらかな日差しの中で鶏と遊んでいた。私が米粒を手に乗せて差し出すと、鶏がそれをつつく。その感が面白く、またわが鶏をこよなくかわゆく思うのである。

その時、ある一羽が私の手の平ではなく、腕のやわらかい所を強くつついたので、私は怒った。せっかく好意を持ってやさしく接してやっているのに、何という態度だ。頭に来た私は、その鶏を思い切り蹴飛ばしてやった。その鶏はビッコを引きながら逃げていった。

その時である。「あなたが鶏にしたように、私もあなたにできないと思うか」との声があった。そして臨在がワーツと迫ってきた。私は一瞬にして自分の罪を悟った。と同時に、自分は滅びると思った。そして瞬間的に、「主よ、お許しください」と叫んだ。すると、間髪入れず、「子よ、心安かれ。汝の罪、許されたり」との御声を聞いたのである。イエス様が私の代わりに十字架にかかってくださったことを悟った。いや悟らせていただいたのである。何と有り難い事だろう。私は涙が溢れて仕方がなかった。その晩は嬉しくて、一睡もできなかったと思う。これが、私の信仰の原点である。

こうなると、洗礼を受けるのに何の妨げとなるものはない。

それまでは洗礼を受けたいと思っても、受ける勇気がなかった。主に従いたいとの願いは持つても、従える自信がなく、一步が踏み出せなかったが、今は喜んで従わせていただける。この事がまた嬉しかった。

〈バプテスマ〉

私は早速、榎本先生に受洗を申し出た。そして受洗準備会をしてくださった。その時の御言は、「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ一・十二)であった。私は愛用の聖書に「資格、昭和三六年三月二一日午後三時五分、二三才」と鉛筆書きした。今ではその字は薄くなつたが、ここを読む度に主の恵みと導きに感謝するのである。

バプテスマの式は、昭和三六年四月三日(月)に紫側上流で行なわれた。一緒に受けた方々は、榎本和義兄(現牧師)、尼田隆己兄、伊規須富夫兄(故人)、正野隆士兄、調(現正野)悠子姉、小野道子姉、永谷悦子姉(故人)である。(写真参照)
受洗の時の事を日記に記しているので、次に記したい。

「まだ暗いうちに目が覚めた。今日は洗礼式である。神様が私の祈りに答えてくださった。四時に目覚めさせてくださったことに気づき、感謝する。(注：前夜、これから神様に従

うのだから、全ての道で主を認めて行きたい。まず明日四時の早起きだけど、目覚まし時計に頼らず、神様に起こして頂こうと祈って寝た。)母と隆士ちゃんと三人で出かける。場所は紫川の上流である。着いた時は、もう辺りが薄明るくなっていたが、風はまだ冷たい。

讚美歌一九九番を歌った後、早速準備に取り掛かり、浴衣一着となつて水の中に足を入れる。冷たい。先生が待つ水深腰辺りの場所までかなりの距離がある。水が膝辺りまで来た時は、もう身体が震えて仕方がない。身体を硬くさせて進む。私は今、洗礼を受けようとしている。けれども身体の震えを止めるのに精一杯である。先輩達の話だと、心が燃えて少しも寒くなかつたとの事だが、寒がる私は駄目だなと思つた。

牧師先生は水の中で、しかも長時間、雄々しく立つて一人ひとりに洗礼を授けておられる。私の番だ。先生の前に立ち、「正野眞宏」と大きな声で言う。その時は寒さも震えもなく、不思議なくらい心は凜ぎた。先生は『父と子と聖霊の名によつて、汝にバプテスマを授く』と仰つて、私の腰の帯を取り、水の中に押し付けてくださった。一度では全部浸からなかつたのか、二度押し付けられて完全に水中に没した。そして引き上げて下さつた。これで私のバプテスマが終わった。

でもその時は、新しい命が与えられた事なんて少しも頭の

中にはなく、ただ猛烈に寒い、それを我慢するのに精一杯であつた。けれども、『終わつた。これで神の民に加えられた』という淡い喜びが、心の中に次第に湧き上がつてきた。

陸に上がると、焚き火が焚かれ、紅茶も入れてくださった。次第に生気を取り戻し、清々しい気持ちになつた。それは古い自分がしこりのように残つていたものが水の中に葬られ、新しく生まれた者とされたからかもしれない。

ちようど太陽が向いの山から熱と光をもつて照らし出した。私の心の中からも暖かいものが上つてきているように思える。

さあ、今日から信仰の一年生だ。ここから後退してはならぬ。(なぜなら、もう一度死のからだを身につけることになるから。)神様の御言に従うのに、妨げとなるものは何一つない。雄々しく進むことができるのだ」。

その日の午後から出勤したが、何だか御使が私を取り囲むようにして守つていてくれるように思え、嬉しくてニヤニヤしながら道を歩いたことを覚えている。

それから早いもので、四五年が経過した。その間、遅々とした歩みではあつたが、曲がりなりにも信仰から離れることなく、ここまで来させていたのだ。

私は若い頃、自分のような意志の弱い者は信仰を持つこと

はできない、神様もこんな者は相手にされないだろうと思つてた。そういう者を神様は、実に懇ろに導いてくださった。まことに主は、「わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造つたゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ四六・四)御方である。これからも持ち運んでくださると信じる。



受洗の恵み

林 由記子（前田）

私が受洗のお恵みに預らせていただいたのは、今から四十年前の事です。今こうして、神様の一方的なお恵みと祝福の中に置いていただき、日々豊かなお養いをいただいておりますことは、神様の計り知ることのできない慈しみと憐れみのお陰だと、改めて感謝を新たにさせていただいております。

私は大分県の日田という所で生まれまして、高校を卒業して、母の弟である叔父が八幡で釣具店の御問屋をしておりますので、そこで働くために八幡へやってまいりました。

沢山の従業員が働いておりまして、住み込みで働いている人も十人近くいました。私もその中であつて、朝早くから夜遅くまで、とにかく忙しいばかりの毎日を過ごしていました。御問屋なので商品を発送したり、北九州、福岡を始め九州一円、山陰まで、商品の販売と出荷で一日が夜十一時くらいまで、バタバタ動き回っております。田舎でほんやり、のんびり過ごしていた私にとって、何もかもが驚きの日々でした。

だんだん私もその中で慣らされて、巻き込まれていきまして、夜、製鉄所の溶鉱炉の火を見ては、「ああ、田舎に帰りた。息が切れる……」と、涙を幾度流したことでしょいか。

日々の生活に慣らされて二年目の春に、母が亡くなりまして（父は私が五歳の時に戦死）。その淋しさを紛らわすために、いよいよ仕事に全力を傾けるようになって行きました。時々、「教会に行つてみたいなあ。何処にあるのだろう」と、心が安らぎたいという思いもありましたが、教会がどこにあるか分かりませんでした。

そうしている内に、七年目の十二月の事でした。年末の出荷で大忙しの夕方、少量の咯血をしまして、すぐ近くの医院に駆け込みました。翌日、八幡市立病院で検査をしてもらいましたら、初期の肺浸潤ということでした（その当時は今のよう結核とは言われませんでした）。新しい傷だから早く入院した方がよいと言われまして、市立病院の奥の方に結核病棟がありましたので、二日後に入院しました。

私は病気に對して全然知識もなく、身体もきつくないものですから、すぐに帰れると思つていましたが、入院してびっくり。大部屋に入りましたが、元気な人が多いので、何の病気で入院しているのだろうと思つていましたが、だんだん話を聞いていきますと、三年もいる人、短くて一年半。エッ！私

もそんなに長く入院しなければならぬの？と、だんだん不安になってきました。

入院した夜は、さすがに眠れませんでした。何となく、「万事休す」と思いました。母亡き後、仕事に一生懸命になってしまい、その結果が思いもかけない病気になってしまったのです。しかし、今考えてみますと、これも全て神様の憐れみの御計画であつたとつくづく思い、感謝が溢れてまいります。

皆さん方は、ずっとベッドに伏している人は少なく、安静時間を除いては、動き回っていましたので、私も大分気持が紛れておりましたが、ただ空しさが心の痛みとなつて、今までやつてきた事への後悔と共に、心の奥にどこにも持つて行き場のない悲しみがありません。

入院して五、六ヶ月経つた頃だつたでしょうか。夕方、ベッドの上で何気なくラジオのダイヤルをクルクル廻しておりましたところ、山口放送の番組「良きおとずれ」という太平洋放送協会の羽鳥明先生(後で分かつたのですが)のお話が聞こえてきたのです。五分間の短い放送番組なのですが、それから毎日、そのチャンネルにダイヤルを合わせて聞くようになりました。

ある日の放送で、「すべて重荷を負うて苦勞している者は、私の許に来なさい。あなたがたを休ませてあげよう」のお話の

中で、この言葉を聞きました時、正に私の今の心境にぴったり！と思ひましたので、早速、聖書通読を申し込みました。

それからプリントが送られてきましたが、全然わかりませんでした。時々、羽鳥先生からお手紙を戴いて、返事を差し上げたり、励まされて、終わりまで続けさせていただいたのです。

三ヶ月毎の胸部レントゲンとストマイの注射、飲み薬の治療を受けておりました。三ヶ月経つてから結果が分かるのですが、入院して六ヶ月のレントゲン検査の結果、主治医の先生が診察の折に、「僕はびっくりしたよ。こんなに六ヶ月で良くなる人は、今までいなかつたから。今度の医長会議で発表しようと思つてるよ」と仰つてくださったのです。私もびっくりでした。

三ヶ月目の時はあまり変わっていないように言われ、「そんなに良くなるものではないよ」と諭されたのです。看護婦さんが後で、「あなたはいつも安静を守つていたので、治るのが早いと、詰所でも話していたのよ」と言われましたが、救いに預かつて後、この時、私が神様を求めて六ヶ月目の時だつたと教えられ、主が働いてくださったことを初めて悟らせていただきました。私が安静をしたとかではなくて、すべて主が私の上に憐れみを注いでくださったのでしたのです。

クリスマスの夜のことでした。病院の外から歌声が聞こえてきました(それが讚美歌だったと後で分かったのですが)。二、三曲歌ってくださいました。外を見ると、塀の外に十人くらいの人が立っているのが見えました。誰かが「ありがとう」と叫んでいました。その事を前田教会に導かれてきました時、榎本先生にお話ししたら、「ちょうどその時、信者さんが同じ病棟に入院しておられたから、キャロルで行って賛美したのですよ」と仰ったので、びっくりしまして、その教会へ私が導かれたのも、神様の深い摂理の内にあつたことと、感慨無量の思いです。

それからには焦ることもなく、療養を続けておりまして、一年九ヶ月目に退院となりました。主治医は一年半くらいで退院と言ってくださいたのですが、再発して来られる方が何人もいらつしやつたから、長く置いていただきました。

退院前に、羽鳥先生から七条にありますナザレン教会を紹介していただきました。(中村牧師は病院へも何度か、退院前に訪ねてくださいました。)

秋に退院して最初の日曜日、ナザレン教会を尋ねて行き、生まれて初めて教会という所に足を踏み入れました。先生ご夫妻が喜んで迎えてくださり、また皆様に紹介していただき、

温かく迎えていただきました。

同じ大分県出身の方もおられまして、「私も大分県出身ですよ」と、ご夫妻でやさしく話しかけてくださいました。後で分かったことですが、高木先生ご夫妻の仲人さんだったご夫妻でした。

誠に申し訳ないのですが、その時の御言は覚えていないのです。ただ礼拝の雰囲気と言いますか、私がかんな清らかな所にいてもいいのだろうか？と、そればかり思っていたように覚えていません。

火曜会にも出席させていただきました。だんだんと皆様のお交わりに入れていただきました。(ナザレン教会は、礼拝三十名、火曜会とかは四、五名で、前田教会へ導かれた時は沢山の方々なので、驚きました。)奥様はいつもニコニコしていらつしやつて、お掃除も一人でされていきましたので、時々、手伝わせていただきました。日曜学校も教師の方々のお手伝いをさせていただきました。今まで私の人生で知らなかった別世界の生活へと、主は導いてくださいました。

間もなくして、クリスマス礼拝の朝、教会へ行きましたら、先生が部屋へ招いてくださり、「洗礼を受けませんか」と言われたのです。私は洗礼の事もあまり分らないでしたが、そのまま「ハイ」と言って、その時は先生の娘さんと二人でし

たが、受けさせていただきました。この時、ある信者さんが、「この若い姉妹方が白い衣を汚すことなく……」と祈ってくださったことが、心に残っています。

何も分からないまま洗礼を受けさせていただいて間もなく、「信者さんのご主人が経営している病院の受付として働きますか」と先生方から言われ、教会の会堂の二階に住まわせていただくようになりました。お陰で、夜の夕拝や夏にはナザレン神学校の学生さん達が一週間くらい天幕伝道に来られますので、その食事のお手伝いとか、牧師先生方と生活を一緒にさせていただく中で、私にとつてはどんなに恵みの時であったか、後になって分かったのです。

このようなお恵みの中で教会生活を続けさせていただいている時、集っておられた新川夫妻から、主人との結婚の話が起ってきたのです。私は大病をしているので、結婚はとても——相手の方にご迷惑になるからと常々思っておりましたので、思いがけないことでした。主人もまた、家の仕事の手伝いで就職していなかったたので、「結婚なんてとてもできない」と思つて、諦めていたさうです。

後で、二人でよく話したのですが、「神様つて、すごいね。結婚できないと思つていた者同士を結び付けてくださつたか

ら」。その陰には、牧師先生方の切なるお祈りと新川夫妻の祈りがあつたことを、どんなに感謝したか分かりません。

今、前田教会の伝道集會に集わせていただいて、いつも思うことがあります。先生、奥様、娘さん、私、信者さんが一人か二人のナザレン教会の夕拝でしたが、先生は元氣なお声で御用をしてくださいました。その姿が思い出されます。

「あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴を思いみよ」（イザヤ五一・一）。

いつもこの原点に立ち返らせていただいております。

神なく、キリストなく、望みのなかつた私でしたが、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行つて実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、」（ヨハネ十五・十六）。

神様の御言のお約束どおり、一方的な選びの中に置いていただいたことを深く思わされています。

何も分からずに受洗へと導かれましたが、神様はありのままの私を何もかもご存知の上で導いてくださり、持ち運んでくださいました。

主人と結婚しまして前田教会へ導かれ、ここから私の信仰

生活がスタートしたように思います。と言いますのは、それからの歩みの中で、神様は懇ろに私を訓練してくださいました。主にすがりよりどうしようもない所を通らせていただきましたが、その中で主の御愛に触れさせていただきました、御言に寄り頼むことを教えてくださいました。主イエス様の十字架は、真に私のために立てられたのだと、一つひとつ御愛に触れるたびに、主の十字架の御愛が迫ってまいりました。自分の弱さをいつも覚える者ですが、「あなたはわたしの主、あなたのほかにわたしの幸はない」(詩篇十六・二)と、心から主を崇めております。

私がこの尊い御救いに預らせていただいた陰には、多くの方々のお祈りがどんなに積まれていたか、この事を深く思います。私も今、神様のお恵みによつて多くの魂のために祈りをさせていただく者と、変えていただきました。卑しいこの小さな者に、常に身近にいらしてくださいました主、そして常に顧みていてくださった主を、心から褒め称えます。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださいましたからです」

(ルカ一・四六〜四八)

洗礼までの道すじ

本 部 琢 己(大濠)

私は西南学院高校に入学しました。そこでの入学式の時、確か校長は「あなたたちは希望通り進学ができなくて、仕方なくここに入ってきたかもしれない。でも、あなたたちが自分で来たのではなく、神様があなたたちをここに連れてきたのです」。そういった話がありました。ほとんどのみんなが内心反発しました。私も入学してからは、みんな持たなくてはならない聖書と讃美歌の袋を足蹴にしていました。

でも、狂気に近い形で、「神」というものについて考えました。思春期の迷いと追及で、三つの仮説を立てました。

一つ目は、この世には本当に神がいる。二つ目は、この世はシステムであつて全て法則によつて動いている。三つ目は、神も法則も存在しないんだという、無機的な考えだつたと思います。

どうやって生きていいのか分からない、特に対人関係の苦

手だった私は何かを見出せず、悩みと苦しみの中に小さいころから生きていました。そして、光が差ししてきたのは、好きな女性ができたことでした。それによって、自分が認められる。そして、個人的な感情が肯定される経験をえました。

ところが、それがうまくいかなくなっていたとき、三年生の聖書の授業で使っていた「愛なしには生きられぬ」という本を読みました。そこには、人間には愛がないことが書かれていたと思います。私は自分には愛があると信じていましたので、かなり痛烈だったと思います。愛どころか自分の利欲のために人を利用するような極めて罪の重い人間だったのです。私は自分の罪を神様に訴えずにはいられなくなり、畳の上でもだえ苦しみながら、「許してください」と叫び祈りました。すると、イエス様の十字架の意味がはつきりと知らされました。イエス様が十字架についたのは、他でもない、この自分のためだと、そして、神様の愛が包まれるように暖かく感じられました。

それからは、彼女との関係はますます悪くなり、悩みはますます深まりました。罪を悔いて、主を知らされたものの、基礎となる知識が欠けていたのだと思います。

そのころ、美大受験のため三年生から予備校に通っていま

したが、絵もかけず、夢は大きすぎて、自分が人を認められる関係がなかったのです。予備校の下で、自分は間違っている、彼女から、また友人から絶えず責め続けられました。好きな人から殴られる始末で、でも、たたかれた瞬間、悟りました。自分は自分が正しいと自惚れていたけれど、みんなそれでいいのだという実に肯定的な考えでした。肩の荷が一気に降りました。体が軽く、次の日、学校に行ってみたら、みんなの顔が輝いていました。イエス様がみんなを愛している。強い悟りと認識がありました。

自分は神様のことは知らない。でも、知らなくていいのだ。神様が知っていてくださるのだから。不思議な経験をしました。大濠公園教会にも楽しく通い、絵が変わりました。聖霊の導きで、受験直前に筆が進みました。

武蔵野美術大学に入学し、下宿の近くだった教会で洗礼を受けました。



柿

首 藤 正(前田)

私の家の庭の南寄りの中央に、渋柿の木が一本ある。四十年前、生前の父が植えたもので、少しづつ大きくなり、今では根元の差し渡しが腕の長さ位、背は屋根よりも大きくて、幹は苔に取り付かれたのを大分掻き落してやったが、一見鮫肌で、年経た感じではある。

他にも枇杷や無花果やいろいろ果樹があつたけれど、虫食いや枯死などで次々、姿を消してゆき、父の形見としては、この柿の木だけとなつてしまった。まるで他の果樹の分を生きてやろうとでも言うように、すこぶる元気がよく、ちよつとした庭の主である。これが春から秋にかけて、盛んに葉を茂らす。そのため、木陰に当たる所に植わつた花も野菜も、自然と生育が芳しくないが、それを償うかのように、晩秋には実を華々しく付けるのである。春分過ぎに、枝先に出る芽が見る見る膨らんで、若葉となり、初夏には白い花をつけて、受粉で生まれた子沢山の実がすくすくと育ち、葉陰にかくまわれて、びっしりと勢揃いするのだが、昔から「好事魔多し」と言われるように、夏のある日に、思いもかけぬ行く手が、

今やピンポン玉大に成長した青い実達を待ち構えているのである。来る日も来る日も、何十となく枝を離れて、地上へと落下を余儀なくされる。風もなく、水不足でもないのに、とめどなく大地へと戻され、誰が命じるのか、母なる枝から地上目指して飛び降りて畠に転がる。これらの青い実達は、無論食用には成らず、かと言つて肥料にも向かず、むざむざ十把ひとからげに袋詰めになされて、ゴミに出されるほかはない。この目に見えぬ嵐は当分続いた後、来た時と同じように、ピタツと止む。こんなに沢山落ちたんでは、樹上には何程も実は残つてはいまいと、毎度思う。

秋も深まると紅葉も始まり、次に落葉が来る。「桐一葉、落ちて天下の秋を知る」ではないが、最初に一枚、それを合図に二、三枚と続き、次第に増えていく。さしものびっしり茂りまくつた葉の重なりにも隙間もでき、実の姿が覗けてくる。折からの柔らかい秋の日差しを存外に多い実に浴びて、色付きが始まり、深まつて行く。日照りの当たり具合で遅れ先立ちはあるが、見事な艶に光り輝いて来るにつけ、あの有田焼の陶工酒井柿右衛門が、何としてもこの色を陶器に再現したいと苦心の末、赤絵の焼成に成功したという伝説が、さもありなんと思えるほどになる。

文化の日は、たいがい晴れ。この日を柿ちぎりの日に当て

るのが、長年の慣例で、朝から長柄採果器を持ち出して、亭主の私が数個の実をまとめて枝ごと採り下ろすのを待ち構えた家内が整理して、夜の空き時間を利用して皮むき、麻紐刺し、湯通し、竿掛け、天日干しと、約一ヶ月を掛けて仕上げたものを、大半袋に小分けして冷蔵保存するのである。こうすれば、長持ちするようだ。

年明けて、時々おやつ用に出されるこの干し柿を手にとって思うのだけれども、あの沢山の青い実の中から木自身？によつて選ばれて、営々成熟に至る延長線上で、天日の熱で渋が働きを止め、えもいえぬ甘味が前面に出て来る変質のこと。主が言われる「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」というお諭しは、この私にとって何を意味するか。信仰によつて選ばれ、信仰によつてとどめられ、信仰によつて肉の渋を去り、霊の甘味を帯びる志向のことではあるまいか。

年が寄り、肉体は干し柿並みに皺だらけになろうとも、お前の霊は甘くなつたと、主によつて認められることではあるまいか。

(Spiritual Sweetness)

目標はここにあると……、渋柿によつて示されている気がしてならないのである。

別れの日々

伊 規 須 太 郎 (戸畑)

「痴呆は神の賜物」

ちほうあらため認知症 病気であつて病気でない
ほらカゼ腹痛と同じこと そういう意味じゃ病気だが
うつろう年に逆らえず 弱つていくのは人の常
はつけん法を教えてと 心配する人たずねるが
かいご体験者に学びなさい なつてからではもう遅い
みてもちよつとじゃ分らないで 家族親族騒動のもと
さまざま技術が言われているが 要は親身の心がけ
まだかもうかは分からぬ介護 逃げ道がある早まるな
のこり寿命がマイナスだつて？ それは計算上のこと
たれもあしたは分からぬながら 今この生は確かな事実
まわりに祝され生まれたように ご苦労さんと迎えられ
もとの実家に帰りゆく身 これなら終りは望みの門
のこり人生ながあつても 悔いなく生きる自立の基

「別れの日々臆くはあるが暗くない」

わかれは必ずやってくる どちらが先かわからない
かなしいなどと思わない 生まれた者は死ぬさだめ
れきしに残る令名も たちまち捨てられけがされる
のんびり屋 頑張り屋 ひとしく飛び去る夢の跡
ひとりの女性と結ばれて ともに暮らした四十年
びんの白髪が目立つかと 思うまもなく認知症
もうかと思う若年発症 今や寝たきり置かれきり
ろうじん性と言うも恥ずかし 最若年が最重度とは
くれたも明けたも夫知らず ウンスン言わぬ無声人
は(歯)の汚れ! ? 胃瘻点滴者は 口から食べないのに
あたまは激しく萎縮百十歳なみ 医者も驚くMRI
るーる違反か胃瘻造設? いつの間にやら延命技術に
がんばり抵抗むなしく シブシブ同意書書く夫
くわん者を生かしてと頼めない 通常処置と言われたら
らくにはならない命の養い 心配も経費もタツプリに
くるしみないよに見えるけど 実は戸惑いの渦が一杯
なみだは出ても暗くない 独居になつて遅しくなる
いのちの長さは分からぬが 使命の限り支えられる

「ロングロンググッバイ」

ろんより証拠痴界に立てば ニコッと笑顔が返される
んと頑張る専心もよいが 荒つぽくなる危険性あり
ぐつと余裕でボラ活動 続けなさいと名医の言葉
ろうじんイジメか結局は はじめに金欠空財布あり!
んこもしつこも平気の平左 医療介護じゃ当たり前
ぐつぐつ煮立つた火を消し忘れ 鍋買う金も介護費用
ぐるぐる拘束されても平気 縄抜け達人すぐスルリ
ついのすみかとハードを探す 真の住家はもつと上
ばいと振る手を訝る虚顔 並みの力じゃ行かれない
いま聞いたとは言わないで 何度聞いても初耳初驚

「そしてどうする?」

そらの青さに恐れを覚え 宇宙の果てを思いやる
しつた分かつたできたときと誇る 逆進歩道であとしざり
てんの数とゼロ並べてみても 人知の枠は超えられぬ
どつさり貯めても食い飽きても はて人生何だつけ?
うまれる自分を見た人ないが 死ぬのは大変生き様写す
するり地表をかすめたガガリン 神の領分狭めたと!
るんるん気分で実家に帰り 互いの喜ぶ(死)超越者
?の答えは語られている ルカ十六のリアルヘルを見よ

「あなたはだれ？(あなたは)どこから？」

(いまは)なんどき？」

だれどこからの質問は 今この私にプスリ来た

れきし見る目は色々あるが 皮相近視狭窄じやないか？

？ちよつと考え自明を否認 かたくなな心の意思表示

どこにも証拠がなかったゴメン？ 今更弁解許されぬ

この身の精巧無限の創知 偶然できる確立いかほど

からだが似てて遺伝子同じ 獣は永遠を知らず物を見ず

らくえんを保証されてた人間が なぜ落ちた？今の鑑

？難しい事はない開眼・率直・謙虚・従順が鍵だ

なん百年とて人生に長さなく タイミングのみ

んとスタート二回でストップ三回リセット stop watch

どこからどこ？進化論者は下から下 創造論者は上から上

きをつけよ時はただ流れず 満ちて過ぎ去る被造物

？そんな話と思うなかれ 開眼すべきは今(しかない)

「どうして生きている」

どう見ても死にかかった ボケ老人を思うでしょう

つつこまればその通り 返す言葉ありません

このころは違う肉体に 鞭打ってるんじやありません

いのちの脈は二六億回 電池なく油なく余裕綽々

きのうは去った明日はまだ 今この一拍いのちの重さ

てんか取ってもノーベル得ても 脈の一つも作れない

いかされてる事実に対し 人間もつと謙虚になるべき

ーれつとじゃない人生は 弱い者だが成功道あり



お証し(新しい教会に導かれて)

井 田 修 二(大濠)

主の御名を崇め、賛美いたします。

私達は求め、私達は祈り、そして、この福岡大濠公園教会へと導かれました。一信徒として、共に主を仰ぎ、信仰を守り、教会員としての務めを果たして行きたいと、心から願っております。

私は、元は福岡国際キリスト教会に所属していました。

そこは西南学院の理事長や学院長を勤めておられたL.K. シート先生が創られた教会です。シート先生ご夫妻は、二〇〇四年七月、日本での約四十年間の宣教活動を終えてアメリカに帰国され、同時に、新しい方が牧師として来られました。

それから二、三ヶ月が経つ内に、私はある理由から、翌年三月に教会を去ることを決め、毎年一回定例で行っていた十月の役員会で、その事を先生と他の教会役員に伝えました。当時、私は教会の役員と財務委員長の両方を行っておりまして、急に教会を離れることができなかったためです。

結局、二〇〇五年三月十三日の教会年次総会で自分の任期も終わったことにより、転出の挨拶をして教会を去りました。

当初は、早く新しい教会を探して、またかつてのように、いつも喜んで教会に行けるようになりたいと、心を新たにしていたのですが、それから一週間後に、思いもかけず福岡県西方沖地震が発生しました。

運悪く、その時にマンションの副理事長をやっていた私は、翌年には理事長に就くことが決まっており、地震後の補修工事を始め、過去より持ち越しになっていた大規模修繕計画やそのための資金づくり、管理費と修繕積立金の増額改定、管理規約の改正など、マンション内で処理していかなければならない懸案事項を沢山抱えていました。

結局、それからさらに一年半、理事長を退いた後も、次の理事長と一緒にそれらの仕事を続け、昨年九月、臨時総会の決議を取って一連の懸案事項は漸く完結しました。

しかし、マンション住民で行なう理事会や総会は、どうしても日曜日になることが多く、その間は礼拝に行けない日も度々あって、教会探しの方は容易に運びませんでした。

そのような紆余曲折を経て、この福岡大濠公園教会の礼拝

に初めて来たのは、二〇〇五年十二月十八日、アドベント第三週の聖日で、説教は金生先生、聖書はマタイ第二章でした。

嬉しいことに、ここでは礼拝後に新来会者としての挨拶をする儀式もなく、所属教会や住所・氏名などを書く教会のカードも回ってきませんでしたので、教会探しをしていた私にとっては実に好都合でした。

その頃は、私と家内はいつも別々に違う教会に行くようにしていました。新来会者が夫婦二人だと、何かと目立ってしまうからです。

二〇〇六年四月九日、私は初めて家内と一緒に、この福岡大濠公園教会に来ました。そして、その時から、福岡を留守にした時を除き、他の教会に行くのを止めました。いつも一番後ろの方に座り、礼拝が終われば真っ先に帰って行く私達でありましたが、一緒に教会に来て主を崇め、讚美歌を歌い、説教を聴くことは大きな喜びでした。

しばらく経ったある日、教会のカードが榎本牧師夫人からとうとう回ってきました。他の教会でも経験してきたことですが、信者でありながら、自分の所属教会を書けないのは、本当に辛いことです。

それからも礼拝を重ねて行く内に、いずれは転会したいと思うようになりました。そしてこの気持は、榎本先生のご両親の「汝ハ我に従へ 榎本利三郎・百合子師記念誌」を読ませていただいた時、その揺るぎない信仰に深い感銘を受け、ますます確固たるものになって行きました。

こうなると、次はいつ転会希望を申し出るかです。家内も全く同じ気持でしたので、二人でよくその事を話し合うようになりました。

新年が明けて元日礼拝。その後に続いた三日間の新年聖会。三日夜の聖会で、榎本先生が喜びに満ち、声高らかに靈感賦を歌っておられるのを見ながら、私もまた、大きな恵みと喜びに全身が包まれて、心から主を賛美し、歌いました。最後に祝祷を受けながら、私はすごく感動していました。

その帰り際、何かに突き動かされるように、榎本先生に転会の希望をお伝えしました。モーセの率いるイスラエル人は、約束の地カナンを求めて四十年間もシナイ半島の荒野野をさまよいましたが、我々は二年足らずの放浪の末に、遂に新しい教会へと導かれました。

主よ、感謝いたします。その大いなる恵みに、心より感謝申し上げます。

さて、三十年ほど昔のことですが、丁度、東京から仙台に転勤した一九七六年の秋のことでした。

ある事がきっかけで三浦綾子さんの「塩狩峠」という本を出張中の電車の中で読んだのですが、その時、私は生まれて初めて、信仰の素晴らしさに打ちのめされ、身震いするような感動を覚えました。

他の乗客もいる四人がけのボックスシートで、大の男が鼻をグシユグシユしながら本を読んでは泣いていたのですから、今思い返しても恥ずかしくなりません。

それから、「道ありき」、「この土の器をも」、「泥流地帯」、「氷点」、「旧約聖書入門」、「新約聖書入門」など、三浦綾子さんが書かれた本を片っ端から読んでいきました。そして読めば読むほど、キリスト教への関心が深まっていきました。

その下地として、その頃に放映されていたTVドラマ「大草原の小さな家」のチャールズ・インガルス一家の信仰にも、少なからず影響を受けていたんだと思います。

一方、家内の方はその頃、仙台の社宅近くにあったキリスト改革派教会の中山伝道所に行き始めていましたが、一九七八年のクリスマスの日に、とうとう私も家内と子供にくっついて、生まれて初めて教会に行きました。家に残っていても、

私の昼飯はなかったからです。小さな伝道所でした。足を踏み入れたが最後、仙台を離れるまで抜け出せませんでした。

その内に、また転勤で東京に戻り、千葉市のキリスト改革派教会の稲毛伝道所に移りました。やがて、家内はそこで洗礼を受けましたが、私自身は頻繁に海外出張をするようになり、東京にいても残業続きの疲れを口実に、気楽な求道者という立場でずっといました。

時はめぐり、一九九〇年三月、とうとう私はそれまでの中途半端な、いい加減な信仰に区切りをつけ、ロンドンJCF (Japanese Christian Fellowship U.K.: 英国日本人キリスト教会)で、盛永進牧師より洗礼を授けていただきました。

丁度、四年間のロンドン駐在を終え、四月には東京に帰国しようとしている時でした。学校の関係で、家内と一緒に日本へ先行帰国した長男は、高校一年三学期の編入試験に運よくパスし、私の帰国後も学校の寄宿生としてロンドンに残る次男には、Purley Reformed Church of Reverend Adams さん一家がGuardianになってくださいました。

その時、私はそれまでの人生のあらゆる場面において、仕事でも、家庭でも、学校でも、いつも私達に救いの手を伸べてくださり、最善の方向へと導いてくださった主に、どうし

でも信仰告白せずにいられなくなっていたのです。そして、ロンドンでできなかったJCFへの奉仕は、今この福岡で、JCF九州地区の世話人となつて続けています。

「塩狩峠」を初めて手にした時から、実に三十年の歳月が流れました。

数年前、私は家内と共に旭川を訪れました。三浦綾子文学記念館や塩狩峠にも行き、三浦綾子さんが通つておられた日本基督教団旭川六条教会では、礼拝堂に上がせてもらいました。教会の前で写真やビデオを撮っていた私達に気がついて教会の中へ案内してくださつたのは、偶然にも三浦綾子さんと同姓同名(字は違う)の教会員のお方でした。

そこには、歴代の牧師の方々と並んで長野政雄氏の写真が壁に掲げられていました。その長野政雄兄こそ、自らの命を投げ出して大勢の人命を鉄道事故から救つた小説「塩狩峠」の主人公、永野信夫のモデルとなつた人、この旭川六条教会の教会員だつたお方です。その若くて凛々しい長野兄の写真に向つて、「妻が、私が、そして私達の子どもたちが皆、キリスト者として信仰に導かれました。本当にありがとうございまして」と、私は篤い報告をしました。そして、主を仰ぎ、心から感謝の祈りをささげました。

在主

主に導かれて

井田 れい子(大濠)

私は福岡に生まれ育ち、結婚と同時に千葉県に住みました。そこで二人の男の子を出産しましたが、私の母も主人の母も福岡に住んでいて、仕事をしていましたので、お産はあまり手伝いありませんでした。

一九七六年に次男を出産した後、私は大変な孤独感に襲われました。そして、こんな気持で一生を終わるのではないかと、とても不安になりました。(これを今風の言葉では「マタニティー・ブルー」と言うのだそうです。)主人が家のことを一切しないというのを除いては、家族全員が健康にも恵まれ、子供も与えられ、経済的にも困らず、一見、何の不幸な要素もないのに、です。それも「二人っ子」の私は、一人で過ごすことにも、友達が少ないことにも、子供の頃から慣れている筈でした。

でも、その時、私がどんなに泣きついてても、当たり前散らしても、そのままの私を受けとめてくれる、そして、嬉しい時

には共に喜んで下さるような友達、それもずっと不変なお方が居て下さったら……:……と思うようになりました。

次男が生まれて半年位で仙台に転勤になりました。仙台の自宅の郵便受けに「中山キリスト改革派伝道所」のトラクトが毎週入っていました。ある日、思い切つて電話をして行ってみました。魚本ジョージ先生ご夫妻と他に二名の四人の集会でした。大変暖かく迎えていただいたことを覚えております。そこで四年間、求道者として過ごしました。たつた四、五人の伝道所ですので、休むこともできず、主人にイヤな顔をされながら、子供二人の手を引いて行つておりました。そして即戦力として、すぐ週報書き(当時はガリ版でした)や看板の説教題などを書いたりしていました。当時は奉仕の意味も分からず、「なんでこんなことをさせられるのだろう?」と、時には不満に思つたこともあります。

主人が再度東京本社に戻り、今度は稲毛改革派伝道所(現在の稲毛海岸教会)に通いました。求道者の立場では、やはり外から眺めているだけで、何もつかめないし、思いきつて中に入り、神様やイエス様のことをもっと身近に感じ、できれば自分ももっと強い自分になりたいと思ひました。

牧師先生のお説教に心打たれたからとか、聖書のこの御言葉に惹かれたからではありません。唯、單純に神様の存在を感じ、告白すれば、上からのお力添えがあつて、自分を変えていただけたらと思つたに過ぎません。

ある日、先生に「私は聖書も読んでないし、キリスト教に関する知識もありませんが、信者になれるでしょうか?」と訊きましたら、「貴女が神様の存在を信じ、必要とするのであれば充分です」というお答えでしたので、「私は神様の存在を信じていますし、本当に必要としています」とお話しし、一九八四年十二月二三日のクリスマスに、玉井牧師より洗礼を受けました。

受洗して二二年、子供達の数多い転校、海外赴任と、心配や不安の中に何度か置かれましたが、その都度、それも最後の最後に、主が家族の一人一人に救いの手を差し伸べて下さいました。神様への感謝は尽きることがありません。

(二〇〇七年一月十日、転入会するに当たつて)



久住登山

尼 田 隆 己(前田)

私は四十年間くらいブーツとテニスをやってきまして、この五、六年肩を痛めて休んだり、またやってみては、ということを繰り返してしまいましたけれども、一昨年やはり断念しなければならぬ状態になりました。

若い頃はテニスと登山が好きでしたが、両立はできず、だんだんテニスに傾き、登山をあきらめていましたので、今回すぐに登山をすることに決めました。

それから登山用具を揃えまして、昨年は福智山で訓練を始めました。テニスで足は鍛えていましたので、大丈夫だろうと思っていました。初めのうちは二、三時間も歩くと足の裏がジンジンして登山は大変なことが分かりました。月に二、三度福智山に登って、今年には久住山に登りたいと励んでいます。歳を取っていますし、単独の登山でありますから、装備はかなりのものを毎回用意して登らなければなりません。途中で足をくじいてそこで一泊できるくらいの装備ですから、

十二、三キロくらいの重さになるわけです。そのくらいの装備で春から秋にかけて、福智山で一日五、六時間をかけて訓練しました。冬は月に一回程度でしたが、登っていました。今年の三月ころから十月まで何かと忙しくて、全く登山はできませんでした。春から久住山にと思っていました。登れませんでした。

私の登山は健康管理も兼ねていましたから、登れなくなると何だか健康が損なわれて、すぐにでも病気になるのではないかと、若い頃からそのようにコンスタントにスポーツに親しんできましたから、それができなくなると病気になるような気になりましたが、そのときに深く教えられましたのが、私達が健康で居られるのは、そのように自分が体を鍛えたから、あるいは何かをしたからではない、神様が健康を与えてくださっていらっしやるのだ、ということ。今までは、ぼんやりと一般的なこととして、そのことは頭の中では知っていました。今回はずきりと自分の体験とすることができました。エステルが「死ぬべくば死ぬべし」と神様の導きに従ったことを通して、もともと委ねること、これをしますから健康を与えてくださいというのではなく、神様は何でもおできになれる御方、と一切の根本を信頼すること、を教えられました。だから、こちらが何も決めないで、その日、そ

の日を示されるままにお従いしていけばいいことなので、全く自由を感じるようになりました。それでいて、そのことは一番安心を得ることなのです。それで神様が時間を与えてくださるときに登ればいいと、神様第一にしていけることができました。その結果が、それから十月までは全然登る機会がなく、もちろん主のためだけではなく、子供や孫のために時間が取られたことでもあります、主を前に置いて生活することができました。

そうして十月を迎えまして、福智山と皿倉山に一回ずつ登りました。いよいよ十七日から二日間、九重山群を回る計画を立て、前日は長者原に泊りまして、翌日、牧の戸から登り始めました。紅葉の真っ盛りであこがれていた山に、風もなく秋の陽に照らされて気持ちよく登ることができました。

至る所紅葉で、カメラを出してはまた収めと、なかなか足が進みません。できるだけ写真は我慢するようにして進みました。シーズンで登山客も多く、途中でりんどうの花なども美しく咲いていて、またほかの花なども教えてくれる人もいました。久住山の斜面も色づいてきれいでした。あと二十分くらいで久住という鞍部にリュックを置いて、身軽で久住山頂へと向かいました。次の中岳に登るとき、またここを通り

ますので、身一つで山頂を目指したわけです。久住山頂は石ばかりでごつごつしていました。眺めはよく「ああ、やっと来たぞ」と感慨にひたりながら、三百六十度の眺めを満喫しました。

次に中岳に登るべく鞍部の所まで来てみますと、さつき置いたリュックの一番上の部分が開けられ中身がそこらに散らばっていました。グラインドシートや手袋・タオルなどですが、いったい誰が？ かなりの人が通るので、まさか、人がこんないたずらを？ 山ではよく道端にリュックを置いて、その辺の山に登り、また帰ってくるということをやりますので、かなりリュックがあるからといって中を開けるだろうか？ 「カラスですよ」それまで同行してくれていた人が言いました。「カラスって、これはひもが付いていてチャックを横に引っ張らなければ開かないのですよ。自分でも片手ではなかなか開けられない。片方で抑えてチャックのひもを引っ張らなければ開けられない」。散らされた周りの物をよく見るとチョコレートの箱が食い破られている。それを見たとき納得しました。人間の開け方ではない、食い破られている。それは網になっているサイドポケットに収めていたものです。辺りを見回してもカラスの姿は見えないけれども、ちよいちよいあるそうです。コンビニの袋なんか狙われるというのですが、「リュ

ツクはねえ」ということです。人でなくて良かったと思いがら荷物をもとめて、御池、中岳へと登っていききました。

中岳は久住山より岩が大きくて、大きなリュックのバランスを取りながらの岩から岩への移動は大変でありました。山頂、ここは九州本島では最高峰で一七九一メートルです。ここで昼食をとり一時間ゆつくり休む。同行の人とはそこで別れ、それから一人で法華院温泉に下っていくことになりました。中岳から白日岳や稲星山の鞍部・五差路に下りる時がまた危険で、リュックを放り投げたらさぞ楽だろう、またこんなところで転んで落下したら大変な怪我をしてしまう、と注意深く下って行きました。その鞍部から法華院温泉まで、一人旅で本当に注意深く下って行きました。本当に何度も休み、二時間四十分かかりました。ここも途中何箇所か崩れていて迂回路が設けられていましたが、滑って危険だと思われる所が何箇所もありました。坊がつるを見渡しながら、時刻は十六時近くになりましたが、やっと法華院温泉までたどり着くことができました。本当に無事に着いたものだと、神様に感謝をしました。

同所ではその夜写真教室があるとかで、お客さんが三十人くらい集まっていました。これは素晴らしいおまけだな、と思いがらすぐ温泉に入りました。その若いころ来たときは、

お湯は白くにごっていて、硫黄のにおいがして湯の華などもあったのですが、今はほんのりと白くにおいも強烈ではないので、イメージとは違っていました。疲れた体には何よりのものでした。よく来る方の話によると、数年前に源泉が変わったその時からお湯も変わったのだそうです。風呂場のテラスから山頂が夕陽にだんだんと赤く染まる大船山のグラデーションを十分楽しんで、食堂に行きました。その食事は小屋の食事をイメージしていたものですから、見た途端ワーツというような豪華なものでした。馬刺しあり、から揚げ、おでんあり、また赤米のご飯と、こんな所だと思うようなものばかりでした。しかし、そこまでは道路がついていて一般の車は入れませんが、工事車両や指定の車は直接入って来られますので、私どもがやつとたどり着いた感覚とは違うものもありました。

写真教室は、写真の写し方など技術的なお話ではなくて、藤田晴一さんが来られて、この方は中津（でしたか）に住むプロの写真家の方で、『九重山』や『大分県の山』『九重の花々』（Ⅱでしたか）などの本も出版なさっていらつしやる方です。

花を中心とした写真をスライドで見せてくださったのですが、その知識の豊富なことには驚かされましたし、写真を撮るといふことは、こんなに対象を良く知らない撮れないものだ

ということを教えられました。集まった皆さんは、あくる日みんなで大船山に写真を撮りに行くという企画を楽しみにされていたようです。

翌日は七時ころに食事を済ませ、四十分ころに出発をしました。昨晩はさすがに廊下にはストープがたかれ、部屋には特別に毛布を一枚持ち込んで、暖かい服装で、疲れからかくつすりと寝ることができました。それでまた同行の人ができ、大船山の鞍部まで（段原）登ってきました。大船山頂とその斜面のあまりの紅葉の素晴らしさに、その人には先に行ってもらいまして、そこで写真を撮りました。またリュックをそこに置きまして、カラスの姿は見えなかつたけれども、今度はグラウンドシートできちんと巻いて置きました。カメラとタオルなどを持って大船山頂を目指して、紅葉の中を進みました。山頂の向こうにある御池の周辺の紅葉が真つ盛りで、初めて来たのにこんなものを見ていいのかと、心を躍らせて写真を撮りました。今回失敗したのは、レンズは七十から四百ミリのズームレンズ一本しか持って来なかつたのが間違いで、後一本広角レンズを持つてくるべきであつたと昨日から痛感していましたが、特にここ御池に来て、望遠レンズのためフレームに収まりきれずにお手上げの状態でありました。

まあ心に刻んでおこうとしばらくそこに居ました。それから、惜しみ惜しみ坊がつるまで降りてきましたが、十三時半くらいになつていました。昨日からの登山で疲れてしまつて、もう一晚法華院に泊まるうかどうしようかと迷つていましたが、三俣山のすそを回る雨が池を通るコースで帰ることにしました。ここを通るとすがもり越えを通るより、高低差がなくてよいのです。雨が池を越えた所から長者原に向かう道は、ところどころ道が崩れて迂回路が設けられ、また治山工事もなされていきました。しかし、紅葉のじゅうたんを歩くような所もあり、秋を満喫しながらの下りでした。後三十分くらいで長者原の駐車場という所で休んでいましたら、つい五メートルくらい前の林の中を、キジが静々と長い尾羽根を見せびらかせながら歩いていくではありませんか。「ああ」と見とれてみると、今度は山鳥がチョコ、チョコと、まるで野生の生き物の映画を見ているような感じで、本当に感動しました。神様が本当に恵んでくださっていると感謝しました。

それから長者原に戻つて来たのが十六時半くらいで、車を先日駐車場に置いていたのでそこで着替えて、今度は近所のホテルのお風呂に入るべく探しましたが、五時過ぎではなかなか入れてくれるところはあります。が探し出して入れてもらい、途中もゆつくりして二十一時半くらいに帰りつ

きました。

帰って、またびつくりしたのは、家内が一枚の写真を持ってきて「若いときに私も登った」と、久住登山の時の写真をアルバムから引っ張り出してきたのです。復興教会の人たちと登った時のもので、正野百合子さんも妹さんと並んで笑っています。私は、その家内の若さにびつくりしたのではなく、その久住山頂には土がたくさんあったことです。その比較のために今回の写真と二枚のものを載せますが、この四十年くらいの間にこのような変化があっているのです。

また家内のそのアルバムには、私達の婚約式の写真がありまして、利三郎先生ご夫妻、正野眞宏さんご夫妻、などのお顔が見え、今更ながら神様によるお導きのもと、皆様の暖かいお祈りに支えられて、私達の結婚が導かれたことを感謝せざるを得ませんでした。

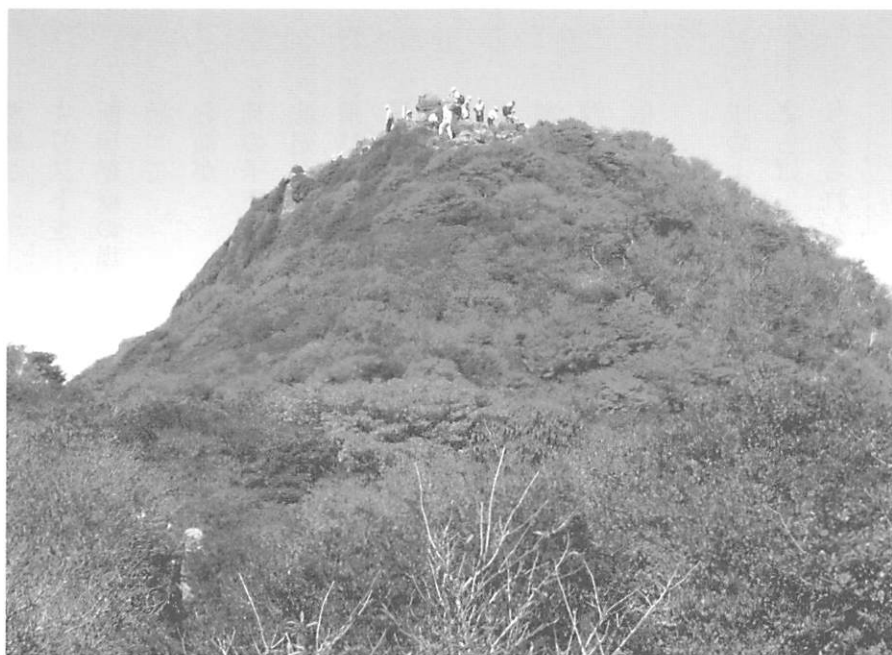
今回の登山にはいろいろなサプライズがありました。その初めから本当に整えられて、本当の意味で楽しむことができました。最後には私達の結婚の意義をもう一度新たにされて、本当に感謝でした。



2006.10.17 久住山頂



1966.10.10 久住山頂



段原方面から紅葉の大船を望む

信仰と時の流れ

— 米寿を前に思う言の葉 —

岩 崎

弘（大濠）

やもめにとりましては

月日の流れは

日葉になります

十五年の歳月の流れが

私には有ります

万物は流転する

世の中は変わります

人の考えも変わります

茶飲み友達は

遺産相続問題解決の

人の智恵です

ささやかな

巡り合いです

息子のたびだち

正 野 眞 宏（前田）

悪魔が

キリストを

断崖絶壁の場所に

誘つて

お前が

神の子であるなら

此処から

飛び降りよ

天使が支えるであろう

信仰と

現実を

峻別された

教えであると

信じております

求めよ

さらば

与えられん

平成十八年二月三日、次男の潔がわが家を出て行った。神戸市での新しい職場に付くためであり、そのための引越し荷物を整理するためである。そして、三月十一日には結婚し、そちらで文字通りの新しい生活が始まる。

これまでも別に生活していたから、少し遠くなっただけで特別変わったことではないが、今回は明らかに違う。事実上の巣立ちである。もはや親の巣に帰ってくることはない。身は来ることはあつても、こちらに出て来るのであつて、帰つてきたのではない。彼の巣は別にあるからだ。彼は本當の意味で自立をして出て行ったのだ。

私は親として感慨深いものを覚える。彼が私の子供と生まれ、今日まで共に生活し、喜びも悲しみも共にしてきた。いろいろな事があつただけに、あの事この事が思い出されて感傷的な気分になる。勿論その事もあるが、それ以上に、主の前に使命が終つたことを感じる気持の方が強い。

彼は私の子であつて、もはや私の子ではない。「それではその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」

(創世記二・二四)とあるとおり、私達の許から離れ、一人の独立した人間として、旅立つて行くのである。これからは、神が彼の主となつて導かれるだろう。それゆえ、私はアブラハムがイサクを壇上に捧げたように彼を神に捧げ、手放さなければならぬ。彼がどんな人生を歩もうが、私の責任ではない。彼は主の前に責任を持つ一人の人間となつたのだ。いちいち口出しするのはやめよう。主が教え、導いてくださるだろう。私は彼が信仰持つて歩むように、陰で祈ることに専念しよう。

そんな事を考えていたら、ふと自分の結婚の時の事を思い出した。四十年前の事である。結婚が決まつた時、私は両親を前に置いて切り出した、「自分はこれから結婚しますが、聖書(前述の御言)に結婚の意義が書いてあります。相手の女性は正野家の嫁に来るのではなく、私の助け人として、そして親とは別の新しい家庭を作るために来るのですから、私を彼女に渡して欲しい。これは決して親を見捨てるとか、面倒を見ないと言うことではありません」。

少し厳しいとは思つたが、思い切つて話した。それは親の私に対する期待の大きさは嫌と言うほど分かつていたし、私もできるだけ答えたいと思つているが、この線がはつきりしていないと、いろいろ問題が起ると考えたからである。

両親、とりわけ母は相当なショックを受けたようである。親孝行の息子から、そんな事を言われようとは夢にも考えなかつたからである。その晩は眠れなかつたと言う。しかし、祈つているうちに、息子の言うとおりであると教えられ、私を主の前に手放すことができ、自分は新しい使命に生きることを示されたということである。私は感謝した。と同時に、私自身が信仰を持つて歩む責任が、主の前にあることを覚えさせられた。

この事があつて、今日まで小さな歩みではあつたが、二人で信仰を守り通して来た。そして、主はその信頼に応えて、実に恵みと祝福の中に導いてくださった。

主に信頼して歩む家庭がどんなに祝福されたものであるか、その事実を見せていただいただけに、今、息子が旅立つに当たり、息子にも(勿論、他の子供にも)主の道に歩んで欲しいと心から願ひ、祈るのである。

これで三人の子供は、それぞれ独立していった。親としての使命は不十分ではあつたが、一応終わった。これからは、私が両親に願つたように、新しい使命に歩まなければならぬ。私は表題に「息子のたびだち」と書いたが、実質的には、私達夫婦の新しい使命への「たびだち」でもあるのだ。

青 空

淵 田 桃 代 (前田)

お証し

三 好 翠 (前田)

主よ

苦しみにあつた時

わたしは空を見上げます

あなたが必ず

そこからおいでになると

語られたから

いつ来られるのかわからないけど

必ずおいでになると

信じているから

早くあなたにお会いしたくて

私は空を見上げます



私は、学生の時からキリスト教の説教を聞くのが好きで、その頃ラジオの「ルーテルアワー」というのがあって、それが日曜日の朝にあり、楽しみにラジオにかじりついて聞いていました。

しかし、社会に出て、そのような時も持てず、次第に忘れてしまつて……。でも、神様はまた私にその機会を与えてくださったのです。それは三好と出会つたことです。三好は信仰はありませんでしたが、義父(三好喜代市)が熱心な信仰を持っていて、私は義父に連れられて、何も分かりませんでした。したが、付いて行つていました。

様々な事がありました。結婚し、またいろんな事があつて教会を離れてしまいました。転勤等もあり、長い年月を経て、しかし教会に足を運ぶことはありませんでした。夫も教会へ行く人ではなかつたし、私達は家族で神社に行くのが慣わしとなつて……。

それからまた長い年月が経ち、私の心が教会へ行きたいと

思うようになったのです。それは三好の父が病に倒れ、アツという間にこの世を去り、私との約束を果たさずに、でした。

私は心残りでした。それで義父の亡くなった後、榎本利三郎先生にいろいろ(三好の家の仏壇の事など)相談し、また祈っていたら、処分という形を取りました。義姉や義妹は川に流すとか、私達に祭って欲しいとか、いろんな事を言っていました。

私は義父亡き後、教会へ行っていました。神様の事はあまり分かりませんが、洗礼を受けてイエス様の言葉を信じて歩みたいと思うようになりました。そして、これが私の信仰だと信じて、一九九九年(平成十一年)に受洗しました。

もう八年位前になります。まだまだ信仰が足りませんし、弱い心で歩いています。初めは聖書も、毎日何回も読みましたが、なかなか大変でした。それは、心が弱かったからだと、今思います。

義父が亡くなって、十二年くらいになります。義父が教会で使っていた聖書や讃美歌を見ると、古くてポロポロですが、すごいなあと思います。榎本先生も話していましたが、義父亡き後、誰も信仰を持っていなかったのです。あれだけ熱心な義父だったのにと、今でも私は不思議に思っています。

私の家族も同じなので、悲しくなる時があります。私は少

しずつ聖書を読み、祈り(今の幸せと子供達の健康、そして夫も主に感謝の祈りをして欲しい)、欲張りに過ごしています。私も時々道に迷います。でも、主が待っていてくださり、道も整えていただき、歩かせていただいています。

今は、日々このように暮らせていただいています。感謝しています。夫も定年退職し、まだ二年間年金はなく、他に収入もない状態ですが、神様は憐れんでくださり、豊かな恵みと愛を与えてくださって、何もありませんが、二人健康で過ごさせてください。感謝いっぱいです。

先々の事は分かりませんが、主が共にいてくださり、支えてくださいますことを信じて、日々歩いて行きたいと願っております。これからも沢山の方々の祈りの中に置いてくださるようお願いいたします。



わが思い出(台湾編二)

鈴木 一 幹 (前田)

一 わが部隊の赴任先

私が入隊した当時(昭和十八年)、日本から満州国に派遣の陸軍部隊は、その通称を関東軍と呼んでいました。

そして、私の配属された隊は、満州二二二部隊(師団名)と呼ばれ、総兵力数は約一四〇〇名で、その内訳は、歩兵連隊員約六〇〇名、砲兵連隊員約四〇〇名、工兵連隊員約二〇〇名、輜重(しゅちょう)連隊員約二〇〇名で、これらの各連隊は、台湾到着と同時に、兵士の居場所(兵舎等)や各兵器・弾薬の収納場所として、当該地で製糖会社を営んでいた台南市大林にあった台湾製糖(株)の未使用中の工場や倉庫を、また空き社宅を陸軍が同社から借り受け、使用させてもらっていました。

私の所属は、この砲兵連隊の第二中隊(前田中隊)で、兵数は約二〇〇名でした。従って、各中隊毎に現地大林地区の台湾製糖工場の敷地内の割り当ての場所に配置されました。

前田中隊組織

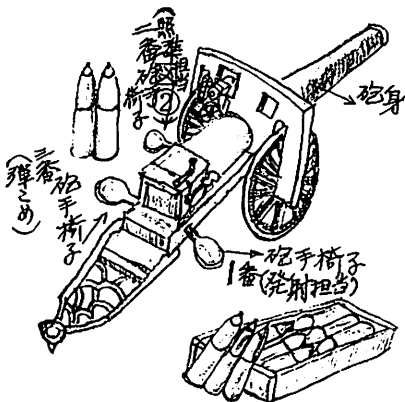
	第一分隊	四〇名	砲二門
	第二分隊	四〇名	砲二門
	第三分隊	四〇名	砲二門
	第四分隊	四〇名	砲二門
	その他	四〇名	………観測・通信
計	二〇〇名		砲八門

二 大砲は旧式の改造品

わが隊の砲は、その名称を「改造三八式野砲」と言われ、明治三八年製で、当時は日露戦争に使用されたものを、近年改造したものとのこと、砲筒の口径(直径)は十センチのもの、十五センチのものとの

二種類あり、十五センチのもののは野戦重砲と言われている。当中隊分は八門全部が口径十センチの普通の野砲でした。

改造三八式野砲(明治三八年製)



三 武器、弾薬の引取・運搬

佐藤班長殿より、夜の点呼時「明日は朝八時から当隊を出発して、高雄港に武器・弾薬を受け取りに行くので、留守番兵を残して全員出発する。今回の到着便は内地からで、武器は小銃・機銃・弾薬類で、小倉の陸軍補給廠から送ってきたものだ」とのことでした。私も兵員一二〇名の中に含められ、明朝、高雄港に向け大林を出発することになりました。

四 事務室勤務を命ぜらる

翌早朝、事務室の山崎曹長殿に呼ばれ「君は、今日は事務室勤務をして欲しい。事務処理が溜まっているので、加勢を頼む。皆と高雄には行かなくてよい。連隊本部に提出のための文書整理のためだ。佐藤班長や中隊長殿にも承認を得ているので、君が一段落したら、事務室に来てくれ、よいな」と言われました。従って、今日の重作業には参加しなくてよいことになりました。

中隊長殿以下全員が高雄港目指して出発し、留守の兵約十名が中隊に残っていました。私は皆と別れ事務室に行くこと、山崎曹長殿が「先程、連隊本部の大塚准尉殿から君に電話があり、鈴木が来たら電話させます、と答えてある。これからすぐに電話しなさい」とのことでした。准尉殿は、「おお鈴木か

実は事務処理で分らぬ事が可なり出てきたので、また君に習いたいと思い電話した。君の手のすいた時に連隊本部事務室に来て欲しいが、よいか」。私は「よく分かりました。今から相談し、今すぐにご返事します」と答え、直ちに相談し、「午前十時までにお伺いします」と答えました。さらに山崎曹長殿は、「大塚准尉殿の用件が終わったら、帰りに、先日君が歯科治療に行った歯医者に治療に寄ってくるがよかろう」と、私にご配慮をいただきました。「また、連隊本部まで可なりの距離もあり、馬に乗って行きなさい」と言われました。往復の時間的にも助かると思ったので、乗って行くことにしました。

また、「君の短靴では乗馬は無理だから、おれの長靴を履いて行きなさい。ちょうど、そこに脱いで置いてあるので、合わせてみる」と言われました。私は早速履いて見たら、丁度合ったので、「明日は、これをお借ります」と答えました。山崎曹長殿は、「君が連隊本部に着いたら、大塚准尉殿にくれぐれもよろしくお伝えください」と言われました。

五 乗馬での外出

次の日、朝食後九時から中隊員約一二〇名は、各小隊長の引率のもと、高雄港目指し出発しました。残留兵は約十名ほどで、留守の中隊の警備に当りました。私も九時三〇分頃、

乗馬にて中隊を出発し、連隊本部に向かいました。

大林を目指し国道を進んで行くと、前方から歩兵隊の一個分隊約十名ほどが伍長殿の引率により、こちらに向かつて歩いて来ました。私は馬上から、すれ違い時に、私が先に敬礼をしようと思っていましたら、引率の伍長殿が「一同、歩調を取れ！」と号令を掛けられました。そして、いよいよ近づいたとき、今度は「かしら右！」と号令を発し、馬上の私に先に敬礼をされました。並んで足並みを揃えていた兵達も皆、私の顔に一斉に注目しました。私は仕方なく貫禄をつけて答礼し、

急いでその場を通過しました。歩兵を引率の伍長殿が、馬で行く私に、まさか二等兵だとは思わなかったのです。しかも、乗馬用



の長靴を履いているので、将校と見間違えたのではないかと思います。馬上で苦笑しました。

連隊本部に到着し、正門衛兵所で用件を述べ、馬を預け、本部事務室に大塚准尉殿を訪ねました。准尉殿は「やあよく来てくれたね。ありがとう。君もお元氣そうで何よりだったね」。「さて、今度の人事異動で、当連隊からは将校を含め、約五十名が内地の各部隊に転属することになり、これらの兵の功績名簿と戦時名簿を整理して、転任先の部隊に送らねばならなくなつた。従つて、君にまた記載方法を習いたいと思うので、よろしく頼む」とのこと。私は「兩名簿の整理は何日頃までに入ればよいのですか」と尋ねました。大塚准尉殿は、「今日を入れて、あと十日くらいしかないが」とのこと。私は、「それでは、その五十名分の名簿を私がお預かりして、少なくとも今日から七日後位までにお届けしましょう」と言いました。准尉殿は、「いつも君に助けてもらつて申し訳ない。君の帰りに五十名分の名簿を揃えて革鞆に入れて預けるので、よろしく頼む」と言われました。そして当番兵に、「二名分の昼食を用意してくれ」と言われ、「何も無いが、昼食を一緒に食べてから帰つてくれ」と言われました。私は遠慮なくよばれました。食事中に准尉殿は、私に「今度、来る三月三日に当連隊本部で、今年度の幹部候補生の試験があることになっている。受験生

名簿に君の名前もあつた。とにかく、頑張つて是非合格するように」との励ましの言葉をいただきました。

六 歯科治療

昼食後、大塚准尉殿に挨拶して、名簿入りの革靴を預かり退室し、台南市大林の王歯科医院に向かいました。玄関横の八ツ手の木に馬を縛り付け、受付で受診手続きを終えました。受診患者はすでに約二十名くらいに見えました。軍人優先の取り扱いから間もなく名を呼ばれ、診察室に入りました。

早速先生から前回の治療後の状況を聞かれた後、「鈴木さん、先日私が診療終了後自宅に帰つて、小倉時代の歯科医専の同窓会名簿を見つけました。早速同級生欄を調べて、やつと見つけ出しました。その方は行橋町(現在は市)の魚町で、現在も歯科医院を開業している田中一郎君で、数日前に彼に手紙を書き、その際鈴木さんの事を書いておきますので、その内、私のところに返事がくると思います」とのこと。

私は「田中先生には私共一家が歯科治療で大変お世話になり、特に私は入隊前まで治療でお世話になりました。また祖父が当時、謡曲をやつていまして、田中先生は友人の方数人と一緒に来られ、家で謡曲の練習をされておられました。従つて、祖父とは特に実懇の間柄だったようです」と話しました。

さて、私の治療も終り、まだ患者さんも残つておられるので、今日はこれで失礼しました。午後四時ごろ帰隊し、山崎曹長殿に帰着の挨拶をしました。山崎曹長殿は、「それはご苦労でした。功績名簿等の整理は大丈夫か？」と心配されていたので、私は「大丈夫です」と答えました。

七 武器類運搬中の被爆

さらに山崎曹長殿は、「今日は君が居なかつた間に、大変な事があつた。それは午前十一時頃、高雄港に武器や弾薬を受け取りに行つた兵達が帰路、屏東(へいとう)の山路に差し掛かつたところ、米軍機の空爆を受け、大砲その他弾薬等が被爆し、その時、運搬中の兵の内約三十名が被爆し、負傷者が出る有様でした。直ちに被爆者を台南陸軍病院に緊急入院させ、残りの武器、弾薬は各隊でそれぞれ整理搬出したが、大変だった」との事でした。

「明日は入院中の負傷兵の手術後の輸血のため、各中隊から輸血要員が病院に向くことになっている。君も班に帰つたら話があるだろう。では今から帰るがよからう」と言われ、早速退室しました。

中隊帰着後、山崎曹長殿に帰着の挨拶と連隊本部でのことを報告しました。山崎曹長殿は、「それはご苦労でした。大塚

准尉殿にはわが中隊は大変お世話になっていたので、できる限りの手助けをしてやってほしい」と言われました。次に「明日は午前九時頃、台南陸軍病院に輸血のため約五十名行くことになっている」。A型の者を優先している」とのことでした。私は「自分もA型ですから、病院に行く時には、私も参加させて下さい」と伝えました。

八 台南陸軍病院での被爆

翌朝(三月二日)九時頃、連隊本部に各中隊より、輸血要員が集合し、私も第二中隊の一員として、その中に参加しました。各中隊からも、引率してきた下士官一人と衛生兵一人が付いて来ていました。一同は直ちに出発し、やっと台南陸軍病院に到着しました。

昨日被爆入院した兵が収容されている病棟に案内を受けました。病棟はほとんどが木造スレート葺の平屋建てで、一間幅廊下の横に大部屋(十六ベッド)一部屋と小部屋(四ベッド)二部屋、診察兼治療室一部屋、その他の小部屋(医療材料等収納)二部屋で、以上が一病棟一棟の内容でした。

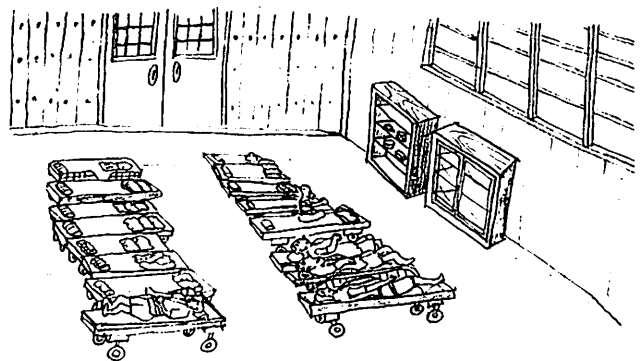
負傷兵の様子は思っていたよりひどく、ほとんどの人が腹部に弾を受け、内臓の手術を受けた者、足を負傷し、左足の切断手術を受けた者等、大部分の者が輸血を受けていました。

一番廊下に近いベッドに寝ていた患者は、私と同班の同年兵の高林満州(みつくに)君(二等兵)でした。彼は

下腹部を負傷し、大腸の手術を受けたと言っていました。目下輸血中で、「昨夜は一晚中痛んで、ほとんど眠れなかったよ」と言っていました。

午前十一時頃、やっと第一回の採血が行われることになり、我々の中からA型の者を後回しにして、二十名が採血室に呼ばれました。残りの者は、私を含め午後からの採血になることでした。

十二時近くになり、我々輸血要員に対し、病院より昼食の弁当が配られました。皆は廊下の椅子等に腰掛けて弁当を戴きました。

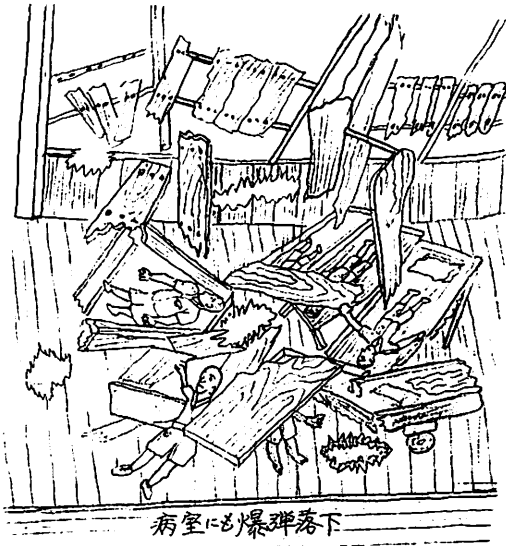


木造スレート葺 16名収容病棟

十二時三十分頃でした。病棟の外庭の方向から大声で、「空襲警報！」と数回叫ぶ声が聞こえました。と、しばらくして、今度は「退避！退避！」の大声がしました。食事中の我々は、この病院の防空壕がどこにあるかも分からず、廊下の椅子に腰掛けたままでいました。

爆音がほぼ頭上に差し掛かった時、上空で「シャー・シユルシユル」という音が聞こえてきました。私は満州で大砲の実弾射撃訓練をした時を思い出し、大砲を発射させた時に砲口から弾丸が飛び出し、遠くへ飛び去る時の「シユルシユル」という音とそっくりの音だったので、これは爆弾落下の音だと気づき、私は

とっさに「伏せろ！」と大声を出し、一番近い高林君の寝台の下の蚊帳の中に伏せて潜り込みました。と同時に、無数の爆弾が落ちて来ました。



私はしばらく伏せたまま、無意識の内に過ごしていました。しばらくして、ひよつと気づくと、病室の天井や横壁が破れて私の頭や体の上にかぶさっていました。これらを手で払い除き、私をもぐっていた高林君の寝ていた寝台のないのに気づきました。高林君は寝台ごと一緒に飛ばされた様子で、姿は全くありませんでした。

さらに、今まで昼食を共にし、廊下の椅子に腰掛けていた輸血要員もほとんど被爆し、死亡しました。私は左足の付け根(腰骨)に弾の破片が当り、かなり出血し始めていました。

すると、左横から声が出て、「鈴木、助けてくれ！」と言われ、左横を振り向くと、何と中隊から我々を引率して連れてこられた第三分隊長の高良伍長殿でした。よく見ると、両腕が肘の付近からちぎれ、出血がひどく、さらに後頭部にも弾が当たり、かなりの出血をしている様子でした。私は止血する材料はないものと周囲を見回すと、横の廊下側の右隣の小部屋が医療品収納部屋で、ガラス戸が破れて、小型の木箱が廊下に数個転がり落ち、その内の一箱の蓋が開いて、中からガーゼや包帯が飛び出ていました。私は左足が被弾のため全く動かず、右足のみで四つんばいに這って行き、木箱からガーゼと包帯を取ってきて、高良伍長殿の両腕に止血しました。しかし、それから五、六分過ぎた頃、急に意識がなくな

り、遂に絶命されました。誠に残念でした。

それからしばらくして、病院の衛生兵や看護婦さん方がそれぞれ担架を持参し、

死傷者共々運び出し、

病棟横の空き地に急ご

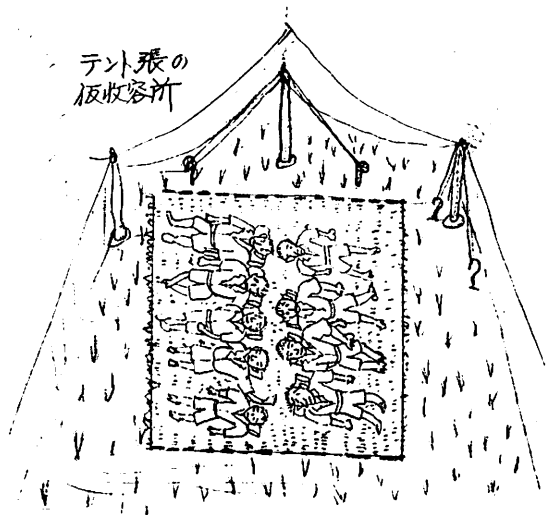
しらえのテント張り収

容所に、私も一緒に運び込まれました。

した。

九 麻酔薬なしで手術

しばらくして軍医殿の回診があり、私の左足も診察され、左足の付け根(大腿骨付近)に爆弾の破片が入っているので、摘出手術を行なう必要があるとのこと。私の手術の番が来たのは、午後三時ごろでした。



テント張の収容所

軍医殿は、「今から始めるが、残念ながら薬品庫も被爆し、薬品類、特に麻酔薬がほとんど被弾破壊したため、使用できなくなつた。従つて、麻酔薬なしの手術で少々痛いと思うが、我慢してくれ。なるべく早く早く終わらせるよう努力するので、頑張ってくれ」と言われました。そして、衛生兵四人が来られ、動かぬように足や腰、手などを押さえつけられ、軍医殿がメスで切開し始めました。

メスで切つては、ピンセットで中に入っている破片をつまみ出していましたが、その内、軍医殿が「今まで全部で破片七個を摘出したので、今日はこれで止めることにしよう。もし先で万一残っている破片でも見つければ、その時はまた摘出手術もできるのです、今日はこれで終わることによい」と言われました。



弾片取出手術(ゴサの上で)
(無麻酔)

時間位かかったと思われました。

私は顔から脂汗を流し、痛みをこらえて来ましたが、これで手術は終わったと思い、一応ほっとしました。

夕方になり、各中隊から、各隊長殿外幹部がそれぞれ来院され、状況調査と被爆者の見舞いと遺体の引き取りに來られました。私の第二中隊からも、前田中隊長殿をはじめ幹部が来院されました。中隊長殿より、「今、軍医殿から君の手術の事をお聞きしたが、麻酔なしでの手術をよく頑張ったな。完全に弾を取り除いたとのことで、あと十日くらいで退院できるだろうとのこと。まあご苦労だったと思うが、これから十分に療養してくれ」と言われました。

当第四中隊の死亡者は、高良伍長殿を含めて十三名で、遺体は直ちに中隊に運び、明日、中隊葬を行なう予定とのことでした。私達負傷兵は、テント張りの仮設病床に収容され、動きもままならず、従って、明日の中隊葬にも出席不可能でした。

「わたしは常に主をわたしの前に置く。

主がわたしの右にいますゆえ、

わたしは動かされることはない」(詩篇十六・八)

翌朝九時過ぎ、中隊から山崎曹長殿が、連隊本部事務室の大塚准尉殿を案内して、わざわざ私のお見舞いに來られまし

た。大塚准尉殿は、「君が病院で空爆に遭い、負傷したと聞いて驚いた。早速顔を見に來たが、命の別状なく、比較的元氣そうで安心した。中隊に行つた時に山崎曹長に頼んで連れて来てもらったが、ほんとによかった。これからは十分治療に専念してくれ」と言われました。

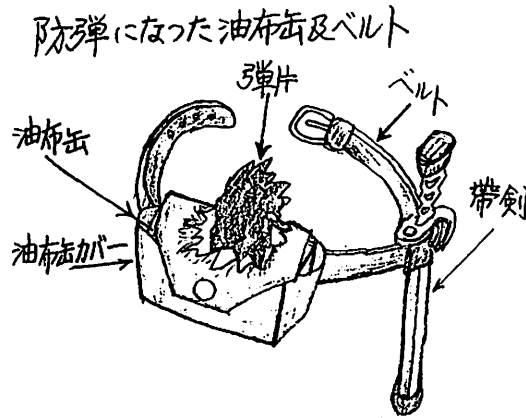
次に、「先日君に預けた五十人分の書類だが、療養中の君にこれ以上迷惑はかけられぬと思うので、今日、山崎曹長とも相談し、私がいつたん持ち帰りたいと思つていゝ」と言われました。私は大塚准尉殿に、「これはここに置いて行つて下さい。私が治療の合間に整理記入して、期限内には必ずお届けします。ご心配はいりませんので、ここに置いて行つて下さい」と申し上げました。大塚准尉殿は、「そうか、それでは君の言葉に甘えて置いて帰ろう。そうしてもらおうと、私は大変助かるからなあ。君は途中であまり無理しないように」と言われ、名簿の入つた革鞆を私の枕元に置いて帰られました。

翌朝の回診時、軍医殿は負傷部の治療をしながら、「この傷は、おそらくあと十日位でよくなると思うので、次の回診時に退院日を決めよう」と言われました。

十 弾を受け止めたベルトと油布巾

軍医殿は私の診療が終わり、隣の病床の患者さんの所に移

動しようとした時、私の病床横の柱に掛けてある私の帯剣の付いたベルトをご覧になり、このベルトにはめてあった油布缶に断片(かなり太いもの)が当たり、缶の中にめり込んで缶が押しつぶされているのを見つけられ、「君が負傷した時に、別の破片が油布缶に当たり、缶が破れ変形したが、これはおそらく、缶とベルトがクッションとなり、破片が缶やベルトを貫通できなかったために、君の腹部はこれで守られたのではなかろうか。貫通していれば、おそらく君は即死していただろう」と言われ、その変形した油布缶を何度も指先で触られていました。



「主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである」(詩篇三四・八)

十一 幹部候補生試験受験の欠席

三月三日となり、今日は連隊本部で行なわれる幹部候補生の試験日だと思いましたが、入院療養中のため、行くことはできませんでした。過去に、私が中学四年から陸士に受験し、合格した時、入学二日目の健康診断で、軍医殿からレントゲン写真の前で、「君は現在肺結核に罹っているので、このまま学校に置く訳には行かない。早く郷里に帰って、速やかに結核療養をするように。後で事務室に手続きさせるので、帰郷の旅費を貰って、明日帰郷するように」と言われ、さすが郷里に帰ったことを思い出しました。母に連れられ、小倉記念病院の内科医師に受診の結果、レントゲン上からも全く異常を認めないとのことで、学校での診断ミスだろうとのことでした。従って、当時は中学五年に再度入学を許されたものでした。今回も受験に縁がないのかなあ、と諦めざるを得ませんでした。

しかし、療養中の暇を利用し、大塚准尉殿から頼まれ預かっている功績名簿と戦時名簿の記入整理ができました。また、数日後の退院も許されました。従って、早速大塚准尉殿に電話で名簿整理完了の旨を報告し、その結果、近日、中隊事務室に受け取りに来られるとのことでした。

毎日の治療のお陰で、腰の痛みもほとんどなくなり、歩行

も杖なしで、ピッコも引かずに歩けるようになりました。

数日後、連隊本部から大塚准尉殿がわが中隊に私を訪ねて来られました。私は直ちに預かつていた革靴の中から五十名分の功績名簿と戦時名簿を出し、整理記載の内容をそれぞれ説明し、ご理解をいただき、一式お渡ししました。

大塚准尉殿は、「今度は君の療養中にもかかわらず、大変なご苦労をお掛けした。有難う。先でまた何かあったら相談に乗って欲しい」と言われました。そして、一緒に連れてきた連隊事務室の上等兵に指示し、用意して持参されていた私への見舞品と土産品を渡してくれました。私は早速お礼を申し上げ、有難く戴きました。それから准尉殿は、「もう一つ、伝言をお伝えしたい。それは、私がここに出発時に、村上大隊長からの依頼で、『前田隊の鈴木二等兵に、明日の午前中に私の所に来て欲しいが、何時頃来れるか、聞いて欲しい』と依頼を受けた」と言われました。私は早速山崎曹長殿にその旨を伝え、十時頃までにお伺いする旨を伝えました。

十二 幹部候補生試験問題用紙の提出

翌朝点呼・朝食後、山崎曹長殿に馬を借用して出発する旨の挨拶をし、連隊本部に向かいました。そして、事務室の大塚准尉殿に早速来た旨の挨拶をして、十時ごろ大隊長室を訪ね

ました。

村上大隊長殿は、「ああよく来た。ここに掛けなさい」と言つて、自分の机の前側に椅子を持ってこられ、私に掛けさせました。「実は先日(過る三月三日)試験当日、君が欠席していたので不審に思い、前田中隊長に尋ねたところ、君が台南病院で被爆し、そのまま入院していると聞いて驚いた。また先日は退院しようだと聞いたので、もし今日、私と逢えるならと思ひ、聞いてもらった」。今日は久しぶりに君の比較的に元気そうな顔を見て安心した。ところで、今日来てもらったのはほかでもない。君が先日の試験に欠席したのは業務上の負傷のためで、私事からではない。従つて、この用紙に私が言うとおりに記載して欲しい」と言つて、机の引き出しから三種類の試験問題用紙を取り出し、私の前の机上に並べられました。

私は早速置かれた試験問題用紙をそつと見ました。一枚目の第一問を読みました。第一問は、軍人勅諭の第一項、「一つ軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」について、その全文を記載せよ、など以下七問がありました。今からこの問題を書くと思つて、相当の時間がかかり、しかも三枚あるので大変だ、と答へておくと、村上大隊長殿は、「君は、この問題を今ここで回答しなくてよろしい。用紙三枚の、それぞれ右下の氏名

欄に君の名前だけ書いてくれ」と言われました。

そして、名前を書き終わった三枚の用紙を受け取られると、「これでよい。私はこれでほっとした。前にも君に話したとおり、君の受験については、君が入隊した時から、安藤利吉師団長閣下より、前田隊の鈴木二等兵の面倒を見てやってくれ、幹部候補生試験も受けることになっていたので、よろしく頼むと依頼されている。幸い今回の試験は、自分(村上大隊長)が試験の総司令を命ぜられているので、君に来てもらって、答案用紙にサインをしてもらった。後十日もすれば合否が出る。以上だ」とのことでした。

私は、「安藤師団長閣下が私のことを世話されるのは、どうしてですか？」と質問しました。村上大隊長殿は、「それは私にも分からねぬが、師団長閣下は君のことには相当力を入れておられるようで、その事を、私がどういふご関係ですか等と細かくお尋ねする訳にはいかんからな」と言われました。「それから、君のことを確認しておきたいが、受験者の願書に添付されている書類を見せてもらったが、君の出身地は福岡県の行橋町(現在は市)で、中学は地元の豊津中学校卒業となっていた。実は私も地元の豊津町出身で、学校も豊津中学に行き、それから陸士に行った。私は中学の同級生には行橋から来ていた生徒が多かったが、特に行橋町の行事では田原・

白川・細野君などが来ていたが、君は知らぬかね」。私は、「はい、よく知っています。私共は通学には、豊津駅まで行橋から田川線で列車通学をしていますが、田原・白川・細野先輩ほかかなりの生徒と一緒に並んで通っていました」。『そうすると、大隊長殿は、私より四歳年上になりますね』。村上大隊長殿は、「そうなるかなあ。同級生だった連中はみな、成績優秀だったね！白川君は第一高等学校から京大に行ったし、田原君は父・姉が医者のため、阪大医学部に行った。また細野君は戸畑の明治専門学校に行った」。『君とは先輩後輩の仲であるから、とにかく体に注意して頑張ってくれ。これから何でも困ったことがあったら、おれに言ってくれ、よいな』と、身に余るお言葉を戴きました。

十三 幹部候補生試験結果発表

その後、十一日位経過した日の朝礼時、前田中隊長殿から、「過日行なわれた幹部候補生試験の結果発表が連隊本部で行なわれたので発表する。わが中隊分は次の通り、まず甲種に合格した者は、第四班の鈴木二等兵と同班の山川二等兵の二名である。なお、山川二等兵は経理部のため、内地の陸軍経理学校に入学することになる。また、鈴木二等兵は台北の予備士官学校に入学することになる。次に、乙種に合格した者

は、第一班の小田二等兵ほか六名(氏名省略)である。乙種の六名は連隊本部で合同教育が行なわれる。以上!」と発表されました。

この時、私は思いました。規律に厳しい軍隊で、私のように特別扱いを受けるとは、前代未聞ではなからうかと。私と一緒に合格した川上君は入隊以来の戦友で、彼は長崎高商卒業後、三菱重工長崎造船所の経理部に勤務していた方で、私より四歳年上で、将来は主計将校になれる方だと思いました。

朝礼終了後、皆はそれぞれ分散し、各班に帰りました。私も四班に帰つてくると、皆が私に、「鈴木二等兵、おめでとう」と言われ、本当に合格したのだなど、やっと実感を味わいました。また、今までに時々私をいじめていた上野上等兵殿や数人の古参兵などが近寄つてきて、「今後よろしく頼むよ。過去には君を殴つたこともあったが、こらえてくれ。君が憎くて殴つたのではない。君に気合を入れ、立派になつてくれるよう願つてのことだ。今後は、おれ達のことを本当によろしく頼むよ」等と言われ、私に何度も頭を下げられました。

そのうち消灯時間となり、皆がそれぞれ就寝しました。私は今日一日を無事に終えたことへの感謝のために、讚美歌を唄い、聖句を奉じ、お祈りをしました。

○ 讚美歌四〇五番

「神共にいまして、行く道を守り、

天の御糧もて、力を与えませ……」

○ 聖句 詩篇三三編

「主はわたしの牧者であつて、わたしには乏しいことがない。……」

○ お祈り

「わが敬愛する天のお父様、常に私を見守り、勇気を付けていただきまして感謝いたします。過日の台南陸軍病院での被爆の時にも、多くの死傷者が出ましたが、私は奇跡的に助けられました。これも貴方が常にお守りいただいている賜物だと感謝いたします。これからも困難が続くと思いますが、どうぞ貴方の御力により、お守りくださいますよう、お願い申し上げます。この願いと感謝を、尊き主の御名により、感謝してお願い致します。アーメン」

(以下次号)

八幡前田教会年末感謝会

二〇〇六年（平成十八年）十二月三日

野村美恵子姉　今、先生が仰ったように、「主は今に至るまでわれわれを助けられた」（サムエル記上七・一二）。本当に、エベネゼルの記念碑を建てさせていただけれることを感謝いたします。

榎本先生がお召されになった後、こうして和義先生が大濠と兼牧なさって、文字通り飛び廻るようにして御用をしてくださいますことを、心から感謝しております。

私も今年八三歳になりました、身体も弱っているいろいろな事が起りますし、その中を今年一年、主が守り支えてくださいました。今年始めに、ヘルペスになり、それが終わると肺炎になり、首の状態はあまり変わらないけれど、主が守ってくださいますから、感謝しています。

肺炎をしました時、肺炎の予防注射があつて、五年間の有効期間があることを聞き、私はお願ひしたのですが、終わった後で考えてみると、私はこれから五年間生きるつもりなのだろうか、勝手に決めてしまっている自分に気づい

て、おかしくなりました。それでも、主がさせてくださったのだと、感謝しました。いろいろ状況は変わってきますが、一切を主に委ねて、安心しております。

それで、利三郎先生が生前、主人の記念誌を作りなさいと言われていまして、その時はびっくりしてどうしたものかと思いましたが、これも主の御用かなと思つて、お受けしたのです。でも、どうしてよいか分らず、また私の体の調子も悪くなって、そのままになっていました。

そのうち、歳も進んで頭の働きも鈍くなってきましたし、何とかしなくてはと思つていたのですが、私の力ではどうすることもできず、それは不可能に思えたのです。しかし、神様が力を与えてくださって取り掛かると、助け手も与えられ、また子供達も手伝ってくれたので、それから順調に作業が進みました。時間はかかりましたが、漸く完成し、願つていたように利三郎先生の記念誌の後に発行できて、すべては神様の導きだったと感謝しております。

苦勞もありましたが、これをする事によつて、主人が歩いてきた道をもう一度しっかり見つけ直すことができ、新しくすることができました。やはり「水をくんだ僕は知れり」（ヨハネ二・九）で、従つた者に与えられる恵みを味わわせていただきました。皆様方がこのために祈つてく

ださり、またいろいろとご心配していただいたこと、全て主が導いてくださったことを覚え、心から主を崇め、感謝一杯でございます。

和義先生 私達は主を証しする責任を負わされております。

ですから、死んでお終いではありません。「虎は死して皮を残す」と言います。クリスチャンは死んでもなお、伝道に用いられるのです。私共の記念誌は、いわゆる会社の周年記念誌のような歴史を語って、というものではありません。それを読むことを通して、神様の栄光を表すのです。野村兄弟の記念誌も、そのために作られたものであります。決して亡くなった人を顕彰しよう、褒め称えようという類いのものではありません。いや、それどころか死んでからも恥をさらすのですよ。生きて恥をさらし、死んで恥をさらす。そして神様が誉められる。これが使命でありますから、皆さんもそういう機会があったら、拒まないように。自分みたいな人生はそんな価値がないとおっしゃいます。が、神様が命を与えて用いてくださるとき、サムソンが死んだライオンの死体から出た蜜で元気づいたように、皆さんの死んだ後から、神様からの蜂蜜が出て、多くの人を元気づけることができます。

高木ツルエ姉 私も今年一年、本当に弱い者を神様が憐れん

でくださって、支えてくださったことを、感謝しています。本当に足許が危なくて、家族の者が心配して、お婆ちゃん気をつけないと倒れるよと言われて家を出るのですが、その中を神様が守ってくださいって、木曜会にも礼拝にも、祷告会にも出席させていただいて感謝です。

聖書は聖書通読表に従って読んでおりますが、和義先生からの「日々の聖言」を通して、私達の歩みを反省する時を与えられ、また、自分の考えでいたのが、ああこんな所に神様の御心があるんだと教えられながら、この一年も神様に支えられて過ごすことができ感謝しています。

家族の救いのためにも祈っておりますが、見える所は三人の孫は教会に来ませんけれど、神様は必ず私の祈りに答えてくださって、全家で神様を崇める家庭としてくださるという信仰を与えられて、祈りながら歩ませていただいております。

私も八四歳になりました、足が弱くなって転びやすくなりました。それで教会に行く時は、万一のための連絡先を書いたものを持っていきますが、一度もそれを使うことなく、神様が守ってくださいなあと、感謝しました。

つい自分の考えで歩きやすい者ですが、神様の御旨というものは、御言を通して、また皆さんの歩みを通して、自分

の歩みを整えていただいて、今日まで生かしていただいた一年だったことを覚え、心から感謝しております。今は事ごとに、「神様、感謝します」の連発で、倒れそうになつた時も、「ありがとうございます」と言つて、神様の憐れみに感謝しております。来年一年も神様が守つてくださると信じて、一步を踏み出させていたただきたいと思つております。

和義先生 高木さんは一時期、体調を崩された時がありました、今年はその記憶では、木曜会は一度も休まれなかつたのではないかと思つています。神様がその時々、御前に近づく力を与えてくださった。今は神様に近づく恵みの時だから、神様が引き出してくださるのだなと思ひました。ですから、私共も健康が与えられたら、その時を大切に、主を求めるときを励んで行きたいと思ひます。

大田敏夫兄 今年で九一歳と八ヶ月となりました。最近、榎本利三郎先生の顔がちらつてきます。

私は十八歳で伊藤商店に奉職し、その社長さんが熱心なクリスチャンで、時々教会に連れて行つてもらつたのが始まりです。十二年前に胃を全部取るような大きな手術をしましたが、その時の讚美歌五三二番が大きな慰めと力になりました。私が生かされた歌でありますから、一番だけ紹介します。

ひとたびは死にし身も 主によりて今生きぬ
み栄えの輝きに 罪の雲消えにけり

(折り返し)

ひるとなく夜となく 主の愛に守られて
いつか主に結ばれつ 世にはなき交わりよ

和義先生 本日に大きな病気をされて、ここまで神様が支えてくださった。大田兄弟の様子を見てみると、神様の力なくしては生きて行けないという気がします。人は病気で死ぬのではないと、しみじみ思いますね。神様の必要があり、使命があり、生かしてくださるご目的があるですね。

今は、生きること自体が苦しい中にいらつしゃいますが、これもまた神様が与えてくださる恵みだと思ひます。どうぞ、気落ちしないで、信仰持つて、元気に主の前に歩んで欲しいと願ひます。

大田邦子姉 今日主人が感謝会に出たいと言ふものですが、祈つておりましたら、その通り主が許してくださつて、今ここにありますことを心から感謝しております。

十二年前の大手術から生かされてきましたが、昨年からは衰えてきて、いつ天国に行くのかしらという状態になつたのです。見える所に動かされやすい私ですが、神様が和義先生のメッセージを通して強めていただきまして、今日あ

ることが不思議でございます。というのは、昨年脱水症状を起こしまして、それが癒されてこれからリハビリという時に、今度は転んで骨折をしたのです。それから衰えが進み、体重が三三キロまで落ちました。それで主治医の先生も、できるだけ食べて運動するように勧められたのですが、そういう時に私が下血して、検査のために入院しなければならなくなりました。先生も家の事情をよくご存知で、できるだけ通院でできるようにと配慮してくださって、短期間で退院できたのです。

検査の結果、どこも悪い所はなく、家に帰ってみますと、神様はいつまで地上においてくださるのかと思うほど、主人が衰えています。主の御用として、新しく老々介護が始まったわけですが、主の憐れみと皆様方のお祈りに支えられて、今日に至らせていただきました。

今年年頭、「全てのを新たにする」(黙示二一・五)と御言が与えられ、己に死ぬことを言われております。まずそこから新しくしていただくよう立ち上がらせていただきましたが、そこで私の検査入院があり、神様のご警告を受けて日々の生活のあり方を新たにしていたいて、スタートしたのですが、まず食べることに動く(歩く)ことから始めさせていただきました。胃の全摘で食道と小腸を繋

いでおりますために、通りが悪く、何でもというわけにも行きませず、今こうしておれることが不思議なくらいです。

主人の状態を見ると、終りの日の近いことを自覚させられ、御霊に満たされて、主を求めなければならぬことを感じております。私自身も体の衰えがありまして、特に目が悪いものですから、目から脳に影響して、判断がつかしいほど鈍くなってきました。いよいよ終りの近いこと、そして今生かされていることが、主が何を求め、どのように生きなければならぬか、和義先生がメッセージの中でお示しくださいます。「我生くるにあらず、キリストわが内にありて生くるなり」(ガラテヤ二・二十)を教えられています。

主人も最近は気も弱くなつて、早く召されたいと言うものですから、あれほどの手術の中を生かされて、今日まで導かれたのは、何か主のご目的と使命があるのだから、自分の事ばかり求めるのではなく、主を見上げて行かなければならないことを、私自身も問われているように思えました。一つ一つのメッセージを、今までになく真剣に聞かせていただいています。お陰様で主人も九月頃から元気が出てきて、礼拝に近づけられるまでに強められ、それでまた、夫婦の会話が出来ようになりました。

利三郎先生ご夫妻が晩年、お互いを労わりながら過ごされている様子を見て、夫婦のあり方としてうらやましく思っておりますが、今私達も同じような立場に立たされて、イエス様のために生きるといふ一方で、私のために生きて頂戴、淋しいからと言っております。先に先生ご夫妻が歩んでくださいましたから、私達もそのように歩ませていただけることを感謝しております。

老々介護もなかなか大変で、疲れもしますし、切り替えも難しく、それこそ己に死に、また「そこは聖なる地である」(出三・五)と靴を脱いで、従わせていただいております。

この後、どうなるか分かりませんが、魂は神様の光に照らされて、喜び勇んで、その日を迎えさせていただけると願っております。

正野眞宏兄 今年も、我が家の十大ニュースを作りました。

いろいろありましたが、その中で神様が導いてくださったことを、改めて感謝しました。その事も感謝でありましたが、私にとって一番の感謝は何かと考えます時に、今年は聖書の御言の味わいと言うか、奥義と言うか、そういうものが深められた事が、何よりも嬉しいことでもあります。これによって魂が養われ、強められたことを思うのです。

これは榎本先生を通して教えられた信仰でありまして、先生自身が歩んで示してくださったお陰で、私もその後を歩ませていただいているのだと考えますと、よきリーダー、よき教会に導かれたものだと、感謝するものです。「よき業を始められた神は、終りの日までにこれを全うする」とありますから、この後どのように導いてくださるかわかりませんが、よき牧者なる方についてゆけば大丈夫だ、と思わされております。

和義先生 今仰るように、御言の命に触れる喜び、これは私達に与えられた大きな祝福と恵みだと思えます。見える事柄も感謝ですが、一番の喜びは、絶えず主の御言によって養われるという喜びを体験することです。これがありませんれば、何があっても問題ではない、そう思います。御言の命の泉は深いのですから、いよいよ深く味わう者となりましょう。

中村光恵姉 この一年、神様が豊かに豊かに恵んでくださいましたことを、もう一度感謝します。

今年一月十六日、主人と行橋に行く途中で交通事故に遭い、それを見た人は、あれは死人が出たねというよう大きな事故でした。私は何が何だか分からない状態で、逆さまになったまま、安全ベルトをしていたお陰で胸の骨を二本

と足を複雑骨折したぐらいで、目に見える所はそういう状態でありました。主人が「光恵、ベルトを外せ」と言うので、それを外すと頭から下に落ちてたんこぶを作ったのですが、その時主人は、「ああ、これは主が起した事だ。仕上げは神様がなさる」と思つて、少しも心が騒がなかつたそうです。

その後、いろいろありましたが、皆様の祈りに支えられて今日に至らせていただき、「今あるは主の恵み」(一コリント一五・十)と、感謝しています。入院中も、退院後も「今あるは主の恵み」、この一年間ズツとこの御言に支えられてきました。本当にどのような中にあつても、計り知ることのできない大きなお恵みをもつて、見ゆるところは様々ありますが、「わが恵み、汝に足れり」(二コリント一二・九)、神様がこういうような状態にしてくださいという事を、朝に夕に覚えさせてくださいいております。

私達が結婚して今年で三四年になります。十二月三日が結婚記念です。四十歳で結婚してにわかお母さんとなり、失敗もあり、喜びも苦勞もありましたが、振り返つて「すべては主の恵み」、神様が涙の谷もそこを大いなる泉となさつて、お約束どおり「善にして善よりほかなし給わない」(詩篇一一九・六八)、主のなさる事は無駄がない、泣く

時は泣きなさい、喜ぶ時は喜びなさい、と言うように、本當に恵みから恵みのうちを歩ませていただきましたことを、感謝しています。

中村栄之助兄 今、光恵が言つたように、一月十六日に私が悪くて交通事故を起しました。これは私が計画して起したものでなくて、その時、光恵に「これは俺が起したのではないよ。主がなされた事だ」と言つて、すぐ感謝しました。先週の御言に、「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従つて召された者たちと共に働いて、万事を益として下さることを、わたしたちは知っている」(ローマ八・二八)とあるように、神様が万事を益としてくださると信じて、これからも行きたいと思ひます。

事故を起したために運転免許証も取り上げられ、光恵が入院している間のお見舞いもバスで行きましたが、バスに乗る楽しみを教えられました。光恵がしずんだ時も、「あなたがたは心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」の御言で支えられました。

和義先生 今、中村さんが仰る、神様が起したことだと言うことは、まことにその通りなのです。しかし、誤解を招きやすいので、少し解説を加えますと、自分が悪くて事故を起したけれども、それは自分がしたのではなくて、神様

が責任もってくださいているのだから、ということですね。直接的には、確かに中村さんの不注意だったということですが、別にその責任を回避すると言うのではない。中村さんはその事は十分知っていらっしやる。ただ、その事の全体は、神様の手の中にあるんだということなのです。それはとりもなおさず、中村さん自身も神様の手の内に生かされて、いることを認めているという証しなのです。ですから、「この事は神様が起していらっしやる」ということを言い換えると、すべてを神様が知っていらっしやるから、後は任せて行きますということになります。

そういう意味では、何でも神様のせいにしたほうが良いわけです。下手に自分の責任にしてしまうから、私が悪い私が悪いと偉そうに言つて、何ができるか。何もできないのですから、全ては神様の手の内にありますと謙った意味で、「これは主がなさった事です」という事なのです。これは本当に大切な信仰のあり方だと思えます。

桑タネノ姉 私も年を重ねてまいりますと、自分の思うようにならないと言うか、気持だけはあるのですが、体がついて行かなくなりました。そういう状態の中で、今年年頭の、「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」(黙示録二一・五、「栄光から栄光へと主と同じ姿に変えられていく」

(二コリント三・一八)、「主を待ち望め、強くかつ雄々しくあれ、主を待ち望め」(詩篇二七・一四)の御言を感謝して受けました。そして、日々の生活の中でこの御言を口に出して、踏み出すようにしています。そして、「すべて の道で主を認めよ」(箴言三・六)の御言を、神様が迫つてくださいますして、一年を通して、イエス様の十字架というものを、しっかりと受け止めさせていただき、硬くなつた私の魂を、恐れなく主に委ねることができるようになりました。

また、新年聖会において先生が、「キリストを着るように」(ローマ一三・一四)とおっしゃいました。キリストを着ると言うと、私達は自分の思いでいるんな物を十二単のように着飾っておりますが、「重荷を負うて苦労している者は、わたしのものにきなさい」(マタイ一・二八)とありますように、この重荷を捨てなければいけないと教えられ、この一年をキリストを着るようにと願つてまいりました。途中で礼拝の御言を通して、果たしてそうなっているか反省させられました。

何分にも年齢を重ねるに従い(満八七歳になります)、不安定な所が出て来て、何か起りますと、これで最後かなと思つてしまいます。けれども、主が「あなたがたのために

場所を用意する」(ヨハネ一四・二)と仰ってくださいますから、「ああ、神様の所に帰れるんだ」と思って安心することです。このように年とともに御言が生きて働いてまいることを、実感させていただいております。

キリストを着ることについても、自分でするのではなく、「これが道なり、これに歩め」(イザヤ三十・二一)と、神様がすべて備えてくださっていることを感謝せずにはおられません。たとえ自分では最悪と思っても、それが神様の道であれば、導かれるまま歩めばよいのだと、そこに立つと、「折に合う助けを」(ヘブル四・一六)とありますように、不思議と御言を思い起こさせて、御言が働いてくださる。何とありがたいことだろう。ああこれがキリストを着ることなんだな、とわからせていただいて感謝しています。

和義先生 今のお話の中で、反省するという言葉があります。た。八七歳にもなつて、この言葉が出るということは、心がよほど柔軟でないと出ません。世の中では、八十を越えれば、もう反省する必要がないと、反省が遠くなります。ところが、幸いにも神様の恵みに預かって、キリストを着る者となる時、主の御前に立つその日まで、とことん主を求め続けます。反省とは、これまでで着ている十二単を脱ぐことです。そしてイエス様を着るのです。これが出来

るのは、私達クリスチャンの特権です。世の中の年寄りには心が硬くなりますが、主にある私達には心が柔らかく、どんな中にも主の御心は如何にと、自分の思いを変え、反省する。これは大きな力です。

どうか私達は、秦さんのように御言の命によって自分を照らして、着ている物を脱いで、キリストを着る者となえられて行きたいと思えます。

林一孝兄 今年一番の恵みは、妻が受洗したことです。妻を教会に連れてくるようになって、八年か九年ぐらいになります。最初の頃は、妻にできるだけ神様の事を知ってもらいたいという思いだったのですが、それがいつしか半強制的ようになって、妻も悩んだと思うのです。私自身クリスチャンホームに育つて、それこそ訳もわからず、小さい時から教会に連れて来られていましたから、自然に来ることが出来たのですが、この世の生活をしてから教会に来るといふ事に対し、私自身どうしてよいかわからず、ある時から、あまり強制的にすることは止めようと思って、後は祈っております。

祈っているうちに、私の心の方が変えられて、受洗するかどうかは神様と本人の問題であつて、私がどうこうできないものではない。例えば、結婚までに信じられるように願

つても、神様から言えば、それはあなたの都合でしょ、というところがわかった。その頃から、肩の荷が下りたというか、一方、祈り的には切実に祈るようになりました。私としてはお手上げですから、神様に働いていただくほかない結婚してからも、ずっと祈っておりました。私から洗礼を受けなさいとか一切言ったことはありませんでしたが、ある時、妻の方から洗礼を受けたとの意思表示がありました。それを聞いた私はそんなに驚くこともなく、「ああ、そうね、そんなら先生に話して、導いてもらおうね」と話したのです。最初の頃から比べると、妻の心も変えられて、私の方が教えられることもありました。

弟の事もありますが、これも神様と弟の問題ですから、私は陰で祈ってあげばよいのだと思っています。

和義先生 家族の救いというのは、「救は主のもの」(詩篇三・八)とあるように主のものですね。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒一六・三一)とあるとおりです。「あなたも救われる」、私達は、自分は救われているから、家族を救って欲しいと願いますが、神様からご覧になると、まずあなたが救われなければならない。まず自らが信じて救いに預かる事が先決です。そうすると、神様が家族を救ってくださる。

今、一孝君が奥さんのためにこうでなきやと、自分で思い描いたスケジュールでいる限りは駄目ですね。もう一度それを主の手に捧げて、自らが主に信頼して行く時に、神様がやってください。これは順序でありますから、私達が家族の様子を見て、一喜一憂しないで、ひたすらに私は主に従うという、その一線を貫き通して行きましょう。

石田秀子姉 私は一月十六日が誕生日で、六五歳の高齢者の仲間入りとなります。ここまで生かされたことを感謝します。それと同時に、すごく不安が襲ってきました、年金をもらう歳になりましたが、その年金が少なく、これでは生きて行けない、〇〇歳までなら行けるけど、それ以上は駄目、公団住宅も出なければならぬ、そうなるとうとうというような不安が、ドウツと押し寄せてきました。

祈っている時に、「神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」(一ペテロ五・七)、「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ヒリピ四・六)の御言が与えられて、立たせていただくことが出来ました。

祈っているうちに、「まず神の国と神の義とを求めなさい。

そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられるであらう」(マタイ六・三三)、自分の心が「これらのもの」ばかり求めていたことを示され、明日の命もわからない者が、ああなつたらどうしよう、こうなつたらどうしようかと心配していることに気づかされ、反省させられました。自分で生きているのではなく、神様に生かされて今日まで来たのだから、「死ぬべくば死ぬべし」(エステル四・一六)、「汝は我に従え」(ヨハネ二一・二二)と仰る主に悔い改めさせていただきました。

その後も事ある毎にサタンが心に働いて不安が襲つて来れば、「死ぬべくば死ぬべし」と主を見上げて行く時、主は「野の花を見よ、空の鳥を見よ」と、御言をもつて支えてくださいます。犬と散歩をして公園のベンチに座つてお祈りしているとき、何十羽という雀がといばんでいる様を見て、「空の鳥を見よ」、何の貯えもない小さな小さな雀でさえも養つておられるではないか、また主の許しがなければありふれた雀でさえも空しくは地に落ちない、あなたは鳥よりも優れた者ではないか、神の形にかたどつて造つてくださった神様が、へまな事をなさるはずがないとおっしゃつて下さつて、鳥を見ながら、涙を流しながら悔い改めました。それからと言うもの、不安が取り除かれて、本当に感謝で

した。

それから十一月の集会でしたか、「おのが日を数えることを教えて、知恵の心を得させてください」(詩篇九十・一二)の御言でもつて、必ず来る終りの日のために備えをすること、それから主が私に何を求めておられ、何をさせようとしておられるか、主に仕え、主の御心を伺い知る日々を送りたいというメッセージが、本当に心に響きました。それと同時に、「あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう」(詩篇八一・十)とまで仰つてくださる。そういう御方がいつも共にいてくださるのに、神様がすべてを握つてくださっているのに、どうして恐れることがあるうか。「死ぬべくば死ぬべし」、私は心を定めて行きたい、そういう信仰で歩みたいと切に願っています。

神様に生かされているということが、どんなに幸いなことか、口では言い表すことが出来ません。死ぬべき者が神様に拾われ、愛され、生かされ、御用までさせていただけるとは、何という恵みでしょうか。主の御愛に応えて、導きのままお従いしたいと願っております。

和義先生 力があり、元気があり、現役でバリバリやっている間は大丈夫と思つていますが、老人の仲間に入つてきますと、大概の人は嫌だなあと思うかもしれませぬ。歳を取

つていろんなものを失い、空っぽになってゆく。しかし、何に頼るかということが、鮮明になる時期でもあります。私達にとつて老齡期というのは、いよいよ神様に近い場所に置かれる時です。神様に頼るほかない、神様が生かしてください間は生きています、そうでない時は、主が備えてくださる御国を待ち望む。主は用意ができたらあなた方を迎えに来ると仰る。行つてみたら、私の居場所がないということはありません。来いと言われたら、用意ができた時だから、その時は勇んで行けばよい。用意ができるまで、地上に置いてくださるのですから、その間は、主が面倒を見てくださる。だから大丈夫です。主を信じて、ただ主だけに心を結びつけていきましよう。

三好翠姉 今年もいろんな事がありました。今年の初めに子供が病気になり、慌てふためいて、今考えると、その大騒ぎは何だったのだろうかと思いません。

それが安定した時に、今度は主人が交通事故に遭つて、幸い車の破損だけで済みました。

それから、アパートの五階から一階に移ることを以前から願つていたのですが、もう少し高齡にならないと難しいところを、この夏に高齡者向けの住宅が造られて、そのの一階に入れることになり、バタバタと引越しました。

神様が本当にいろんな事をわが家に与えてくださつて、とても感謝しています。後は主人が、教会には来ています。がなかなかですので、それを願つております。皆さん、お祈りください。

和義先生 「思うところ、願うところ、いたく勝れる事をなすかた」(エペソ三・二十)とあるように、三好さんのご家庭にこの一年も主が臨んでくださつて恵んでくださった。この事を感謝したいと思います。またご主人の事も、お父さんの時から祈られていますから大丈夫です。主はちゃんと時を備えてくださつていいます。

林由記子姉 息子が先ほどお証しましたように、今年一番嬉しかったことは、お嫁さんが天の御国にある文に名が記されたことです。このために先生方を始め多くの皆さんが絶えざる祈りをしていたことを覚え、感謝いたします。息子が言いましたように、こちらが何とかと思いません。やはり神様が神様らしい時に受洗させてもらったとつくづく思われました。「罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔い改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きい喜びが、天にあるであろう」(ルカ一五・七)とありますが、神様がどんなに喜んでくださつていようだろうかと思えます。

もう一つは私の事ですが、今年の新年聖会の時に「栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」「主を待ち望め、強くかつ雄々しくあれ、主を待ち望め」の御言が講壇に掲げられているのを見まして、ああ、主が成してくださる。「わたしは主のはしめのためです。お言葉どおりこの身に成りますように」(ルカ一・三八)と受け止めまして、スタートしましたが、早速訓練させていただきました。

それは喉の甲状腺に痛みを覚えて、三か月ごとの検査が続き、いろんな事で震われました。どんなに心が騒いだが、病院に行くと血圧がポーンと上がるのを見てもわかりません。召される事については、神様からお約束を戴いて、住まいを備えてくださっているのですから、それでもう恐れないつもりですけれども、闘病生活をこれまで見てきておりますので、そちらの方に目が行き、あなつたらどうしよう、こうなつたらどうしようという騒いでおります。

そんな私でしたけれども、感謝な事に、主が時に適った御言をもって励まし強めてくださいました。それがまことに喜びであり、力となるのです。

一つひとつ検査を終えて、自分が今どんな信仰に立っているのかを揺さぶられたわけですが、お従いするとはどう

いうことであるか、お委ねするとはどういう事であるかについて、深く教えてくださいました。

この一年は、私にとつて本当に恵みの時でありました。私は格別に愛されているのだなあと思います。パウロが「私の恵みはあなたに対して十分である。私の力は弱い所に現れる。だから私は喜んで自分の弱さを誇ろう」と言っていますように、この弱い者に主が届いてくださる、こんな者のためにこそ主が十字架におかかりになったのだ、ということを悟らせていただきました。

今年の御言のとおり、主が「栄光から栄光へと変えてくださる」お約束を着々と行なつてくださることを覚えます。歳を重ねるごとに魂が整えられるということは、感謝な事です。この後は、「恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい」(ペリピ二・一二)とありますように、その事を心に銘じ、祭壇を築きなおして歩みたいと願っております。この一年は感謝でいっぱいです。

和義先生 この一年は林さんにとつて大きな試練だったと思いますが、信仰を固くしていただいた恵みの時だったなとしみじみ思います。いよいよ歳を重ねるごとに、神様はもつともつと恵みの高みに引き上げてくださるのですから、大いにチャレンジして行こうではありませんか。

林信一兄 この一年、わが家も昨年から引き続いて、いろいろ病気であるとか様々な事柄のために、考えれば考えるほどまとまりがつかないほどでありました。しかしその反面、神様の大きな支えによつて守られていること、生まれた時から神様の摂理によつてこの地上に生かされている事ではないがしろにしてしまう事が多い。その事も神様によつて思い起こさせていただき、今日に至っております。

私の家内も長い間病の中、と言つても一日中床にあるわけではなく、外観は普通の人と変わりませんが、昨年五月に狭心症の診断を受けて即入院、現在はステント、血管を広げるワイヤーが入っている状態です。三本の動脈のうち二本、一本は九十%、他の一本は七五%コレステロールによる動脈硬化とかで血流が悪かったのですが、治療の結果、血流も正常な状態となりました。しかし、一年後の検査がこの春ありまして、動脈の元の箇所が狭くなつてきているとの事で、大きい方の血管は最終的にはバイパス手術になるだろうと思つていますが、本人は状態を見て、どうしても悪い方にしか考えない。そういうことでは駄目だと言つてはいるものの、そこから脱却できず、そのため、かえつてあつちこつち体の不具合、自律神経失調症が出る。本人にとつてはたまらないような状態です。四、五日前は、

頭のとつぺんから足先までどうしてよいやらわからない。一緒に生活している私も、どうしてよいか、手も出せないような状態でした。

今月八日の日に、予約しておいた心筋の検査をし、その結果によつては、そのまま入院というところまでなつていきます。病院の方は心配しなくてもよいと言つてくれていますが、なにしろ心臓のことですから、一歩間違えればそれで終わりということ、そうなつたらどうしようかというのが、すぐ頭の中を駆け巡るわけです。

神様にお祈りをする事はできませんが、幸か不幸か神様を見ることもその声を聞くこともできませんから、その時は必死に祈つても、時が経てば忘れてしまう。それが人間の本性ではないかと思ひます。けれども、歳を取つて周囲を見渡せば、それこそ落葉が枝から離されて川の中へ落ちて行く。落葉は何をせずとも川の流れに身を任せておれば、苦勞せず下流へ行くことができる。それ一つを見ても、人間がいろいろ騒いでも、どうにもならないことを思わされません。

神様は私達に喜びと平安を与えようとしてくださつていと、頭ではわかつていても、どうしても神様の御心をうまい具合に取り入れることができない弱い者ですが、後

に神様ありがとうございますと、心の底から感謝の祈りを捧げることができる。こういうような思いを最近悟らせていただき、病を通して、神様の大きな恵みを心から感謝し、そして今こうやって命を与えられて生かされていることを、有り難く感謝しております。

飯田美紀子姉 昨年の感謝会から今日までの間で大きな出来事は、昨年暮れから長女が急性肝炎になりました、一ヶ月間入院して休んだこと。それから、次女が一月一日の新年礼拝の時から体調を壊し、冬休み中家に帰って寝ていたという事がありました。その後、母も体を悪くし、それに私も風邪がひどくなつて三ヶ月も長引いてしまい、新年は病氣から始まったという具合でした。「一年の計は元旦にあり」ではありませんが、最初悪いことがあると、ズーッと続くのではないかと思つてしまいます。しかし、一年を経た、いろんな中で神様が守ってくださったこと、健康がなければ何もできないこと、一つ一つ祈つていかなければならないことを学びました。

そういう時に与えられた御言は、「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す」(エレミヤ三三・三)でした。神様は御言を持つて臨んでくださって

いるのに、私達がそれを見逃してしまっている、しっかりとした信仰で受け止めなければならぬことを、病氣を通して教えていただきました。

主人がまだ救われていませんで、それが私の祈りの課題なのですけれども、自分がこうして欲しいと願うばかりではなく、神様が救ってくださると信じて、子供達とも祈つて行こうと言っております。

それから、母が以前から行つてみたいと言つていた広島と宮島に、元氣で行かせていただきましたことを感謝しています。主人が広島ぐらいなら車で行けると言つてくれたのですが、私としては母と旅をしたかったですから、主人には悪かったのですが、二人で行かせてもらいました。初めての経験で、道中、母から信仰のいろんな話を聞くことができ、自分の信仰の反省もさせていただき、感謝な旅となりました。

廣田壽兄 主に守られて、ここまで持ち運ばれてまいりました。先生始め皆様方の祈りと交わりの中に加えられておりますことを感謝いたします。

年末の感謝会は、一年を振り返つてみるわけですが、神様の極みの御愛は十字架だと思ひますし、そう教えられております。年頭の聖会において、「栄光から栄光へと、主

と同じ姿に変えられていく」という御言が与えられました
が、これは正に至福の御言、これ以上のもはないのでは
ないでしょうか。あまりにも大きくて、理解できないと思
うほどです。

今朝ほども、昔は良かったという話がありました。今
の世の中があまりにも内外共に問題が多く、事件・事故も
多くあります。先行きどうなるのだろうか、明るい見通し
も立たず、打開できないような気がしております。

若い時の事を思いますと、知識を詰め込まれて、教
会でも認識の信仰でした。時々反抗的になって、批判した
りしました。中年になってまいりますと、わかったような
顔をするわけです。しかし、今年八十歳になりましたが、
聞いている御言が若い時と、また中年の時と違いました、
心と体全体で受け止めると言いますか、ズシリと思いの
です。今それを実感として、味わっております。

いろんな中を通して、一年半前にした大きな手術の後
の検診を九州厚生年金病院で受けまして、日本で初めての
大きなCTによって、一度に各方向から数十枚の写真が撮
れるというのですが、その結果、別に異常はないという
ことでした。しかし、やはり弱いですね。心を騒がせます。
結果を聞き、神様の恵みと皆さんの祈りによって、今日あ

るのだと思い、感謝しました。

廣田千穂子姉 今年の春に交通事故に遭いまして、けがをし
ました。どうしてこんな事がという思いもありましたが、
神様から守られているのだということをお教えられて感謝
しております。肺炎になった時も、入院もせずすみまし
た。交通事故の時、その時は気を失っておりましたが、状
況は分かりませんでした。すぐ手当てを受けまして、先生
からも長引かずに治りますよと言われて安心したのです
が、周りの人からもつとひどいけがをしてもおかしくはな
かったと言われて、どんな時も主が守ってくださいることを
感謝しました。

子供達の事を考えましても、いろんな中を通しており
ますし、私共も信仰の先輩としていろんな話をしながら、
少しずつ心を開きつつあるという状況です。皆様の祈りの
うちに覚えてください。

筑山文彦兄 本年一年も様々な事があり、アツという間に過
ぎたように思います。

まずもって、今年も御前に引き出されて、御言を与えら
れて歩ませていただいたことを感謝します。腰を痛めまし
て、今年で二年になります。しばらく痛むこともありまし
たが、お陰様で最近痛むことがなくなりました。

ところが先日、椅子の上に乗って高い所の物を取ろうとして降りようとした時フラフラとしまして、転んで手をつけて、肩を傷めてしまいました。それで今日は、神癒会に出させていただきました。

「わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ四六・四)との御言を感謝しております。

島崎博子姉 去年の六月の半ば頃、庭でレンガが後ろから当たって、股関節を打撲しました。それは一ヶ月で治ったのですが、それと共に以前から患っていた湾曲性股関節症が悪くなつて、痛くて歩くことができず、夏の暑い一月半ぐらい寝たままでした。私は七八歳になるし、寝たきりになつて、私の人生も終わりかなあと感じていました。子供にもそう言う、「お母さん、そんな暗いことばかり、後ろを振り返るばかりじゃないの。私達はお母さんが少しでも明るくなるように、一生懸命やっているのよ」と言われまして、私もそうかなあと思ひまして、光成さんが骨粗しょう症で寝ていた時、利三郎先生から一日一章、聖書を読みなさいよと言われたことを思い出し、私も病床の中で聖書を読んでいました。

そうしたら、北福祉の方から良いリハビリ病院を紹介されて行っている内にだんだん回復し、杖を付いて礼拝に行けるようになりまして感謝しています。

一度は人生も終わりかなと思いましたが、病氣を通して、先生や皆さんにお祈りしていただき、また自分も祈っているとということ、とても目が開かれた思いがします。

利三郎先生が、神様は私達を妬けるような思いで愛しておられると仰っておられました。今度の事で、こんなにも神様は私を愛してくださいただでなく、人を愛する気持も湧いてきまして、もともと私は人を恐れて、できるだけ人を避ける場所があつて、人を愛することができなかつたのですが、何だか世の中の良い人のように見えて、みんなと仲良くしたいと思うようになりました。

この病氣をして大変よかつたと思ひます。今はタクシーを使って教会に来ていますが、少しも惜しいと思ひません。歩く力も与えられて、新しい世界が開けたように思ひます。

首藤正兄 私も島崎さん同様、人を恐れる人間でした。それが五、六年前から、娘の子供を預かつて面倒を見るようになりまして、連れて歩いてみると、通りすがりの人が声を掛けてくれるわけです。すると、だんだん人と物を言うの

が苦にならなくなりまして、信徒会などでペラペラしゃべるんです。「人は聞くに早く、語るに遅くあるべきである」(ヤコブ一・十九)とありますが、しゃべった後で反省し、御言に反することをやってしまった、これは謹慎ものだ、と落ち込むわけです。お祈りしても、なかなか回復しない。

この前ふと、「人は心に信じて義とされ、口で告白して救われる」(ローマ十・十)、心に信じるだけでは駄目だ、口で言い表して救われる、確定するということを思い出させていただいて、その悩みから救われました。

子供を連れて歩いていきますと、見知らぬ人もこやかに声を掛けて、和やかな会話ができます。ところが、子供は日々に成長します。幼児は昨日までできなかった事が今日までできるが、老年者は昨日までできた事が今日ではできなくなる、と世の中では言います。子供と一緒に歩いていても、この前までは手を引いていたのが、最近はずっと先に走って行く、私は後から付いて行くといった具合です。

この前も子供が先に走っていると、通りがかりの女性にこやかに語りかけていましたが、後から来た私の所に来ると、塗炭に表情が変わって、硬い冷ややかな顔になると、これまで子供と一緒にの時はこやかに話しかけてくれたのに、子供から離れると、かくの如し。それじゃあ、

前のは一体なんだったのかなあ、というわけです。

そこで私は考えました。その方の子供に対する愛情のおすそ分けを戴いていたのだと。家に帰って鏡で自分の顔を見ると、なるほどこれでは誰も声をかける気にならない。私は子供のおこぼれを頂戴していただけなのだ。

そのことが分ると、声がありました。あなたがイエス様と一緒におり、密着しておれば、イエス様に対するにこやかな愛が受けられるけれども、イエス様から離れると、よそよそしくなる、だからイエス様から離れたら駄目だと。そうなんだ、イエス様から離れず、ピッタリ付いて行けば、神様のこやかな御声を聞くことができる。私達は神様が何となくよそよそしく感じるのは、イエス様から離れているからだと思いがせいでいただき、よし、これからはこれで行こうと思いました。

和藝先生 私達は神様から顧みられる何もありません。

ただイエス様のゆえに、神様が私達に目を注いでくださる。イエス様から離れて、私だけで神様が見てください、それはないのですから、イエス様にピッタリくっついて行くことです。

下川薫子姉 今年も様々な中を通らせていただきましたが、考えてみますと、神様が恵みをもつて導いてくださったこ

とであることを覚え、私自身、満足した一年であったと感謝しております。

私には神様の大きな使命があり、二人の子供もまだ神様を仰ぎ望むまでに至っておりませんので、祈って行きたいと思っております。

今年、お恵みにより長女が無事出産し、子供が与えられました。世の中ではお宮参りなどいたしますが、教会で献児式をさせていただき、感謝しております。

和義先生 下川さん宅では、今年お母さんが天に召され、また長女の美架さんに新しい魂を備えられるという大変な中でしたけれども、本当に主の恵みであったと心から感謝したいと思います。

讚美歌の五三五番を賛美して、感謝会を終わりました。



八幡前田教会年表(一九九八年～二〇〇六年)

一九九八年(平成十年)

- あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。(ヨハネ十四・一)
- わたしは神である、今より後もわたしは主である。(イザヤ四三・十三)
- あなたがたはわたしの手のうちにある。(エレミヤ十八・六)

一月一～三日 新年聖会

二月 祷告名簿再調整

二月十八日 水村耕一兄受洗(市立八幡病院)

二四日 水村耕一兄召天

三月二三日 石丸浩之兄・矢野美代子姉結婚式

二四日 石丸勇兄召天

四月五日 ぶどうの木二五号発行

十日 渡慶次政夫兄受洗(済生会病院)

二一日 丸山雪夫兄召天

七月三十日 青年会キャンプ(二泊三日、五島にて)

八月十日 三好ツル姉召天

十一日 夏期ファミリーキャンプ

九月五日 大谷敬介兄・有元則子姉結婚式

十月九日 渡慶次政夫兄召天

十一月三日 林正二郎兄召天

二二日 新原さとし兄召天

二九日 年末感謝会

十二月二十日 クリスマス礼拝、祝会

二四日 燭火礼拝

二五日 川原昭二兄召天

二六日 上田省三兄召天

二七日 ぶどうの木二六号発行

一九九九年(平成十一年)

○ わが義人は、信仰によって生きる。(ヘブル十・三八)

○ 万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。(ローマ十一・三六)

○ わたしの愛のうちにいなさい。(ヨハネ十五・九)

一月一～三日 新年聖会

一月 私の遺言書の見直し

二月二十日 中村武弘兄・松浦由布子姉結婚式

四月五日 大見謝典子姉受洗

五月三日 洗礼式(深町郁子姉、三好翠姉、飯田恵姉、

佐々木明美姉)

六月 教会Eメール開始

八月十日 夏期ファミリーキャンプ

十一月十九日 陣内郁芳兄召天

十二月五日 年末感謝会、ぶどうの木二七号発行

十九日 クリスマス礼拝、祝会、キャロル

二四日 燭火礼拝

二〇〇〇年(平成十二年)

○ 見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。

(第二コリント六・二)

○ 一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶ

ようになる。

(ヨハネ十二・二四)

○ 神は主をよみがえらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。

(第一コリント六・十四)

一月一〜三日 新年聖会

一月二日 今村保之兄・下川路津姉結婚式

二月九日 能美イチ姉召天

四月一日 森光洋介兄・正野のぞみ姉結婚式

五月 会堂塗装工事(一週間)

七月二八日 松崎ひろ子姉召天(鹿児島加治屋町教会)

八月 教会内装(床、壁)改修工事

八月十五日 夏期ファミリーキャンプ

十月九日 金生一郎師・金井栄子姉結婚式

十二月三日 年末感謝会

二四日 クリスマス礼拝、祝会、キャロル

二五日 燭火礼拝

二〇〇一年(平成十三年)

○ 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

(ヨハネ一・一)

○ イスラエルの人々よ、恐れてはならない。わたしはあなたを助ける。あなたをあがなう者はイスラエルの聖者である。

(イザヤ四一・十四)

○ 見よ、わたしはすべてのものを新たにします。

(ヨハネ黙示録二一・五)

一月一〜三日 新年聖会

三月二五日 石井勝三郎兄召天

四月五日 野口たまえ姉召天

十五日 ぶどうの木二八号発行

五月四日 頃石昭吾兄・小松瑞枝姉結婚式

六月 祷告簿改訂

七月二二日 一階集會室での礼拝映像開始

八月十四日 夏期ファミリーキャンプ

十月二三日 上田視津子姉召天

十二月二日 年末感謝会

二三日 クリスマス礼拝、祝会、キャロル

二四日 燭火礼拝

二〇〇二年（平成十四年）

○ あなたがたは、心を騒がせないがよい。

神を信じ、またわたしを信じなさい。（ヨハネ十四・一）

一月一〜三日 新年聖会（二日昼から金生伝道師）

五日 加藤雷典兄召天（浜寺聖書教会）

三月二三日 佐藤須磨姉召天

四月一日 高橋英雄兄召天

四月 ぶどうの木二九号発行

四月八日 榎本利三郎師入院

十一日 榎本利三郎師召天

二五日 榎本和義牧師（福岡大濠公園教会牧師）、八幡前田教会代務者に就任登記

五月六日 榎本利三郎師記念会

八月十三日 夏期ファミリーキャンプ

十月十四日 洗礼式（上田武士兄、金子やよい姉、淵田桃代姉、飯田香姉）

十一月二三日 林一孝兄・高村スズ子姉結婚式

十二月一日 一年の感謝会

六日 中原ミエ姉召天

二二日 クリスマス礼拝、祝会

二四日 燭火礼拝

二八日 正野謙一兄・松岡留加姉結婚式

三十日 林磨璃子姉召天

二〇〇三年（平成十五年）

○ わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。

（詩篇十六・八）

○ わたしは神である、今より後もわたしは主である。

(イザヤ四三・十三)

○ わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたとつながっていないよう。

(ヨハネ十五・四)

二三日 ぶどうの木三十号

二三日 渡慶次静子姉召天

二四日 洗礼式(内田知代姉、正野潔兄)

十二月七日 一年の感謝会

二一日 クリスマス礼拝、祝会

二三日 クリスマス訪問

二四日 燭火礼拝

一月一〜三日 新年聖会(金生伝道師)

一月二日 榎本百合子師召天

三月二一日 榎本牧師夫妻記念会

五月二三日 秦春夫兄召天

三十日 榎本和義牧師代務者を辞任

六月一日 榎本和義牧師、八幡前田教会牧師に

就任登記

二九日 教会土地取得感謝会

駐車場等工事開始

七月十三日 「日々の聖言」印刷配布

八月四日 海江田昭夫兄召天

十日 会堂後方トイレ完成

十二日 夏期ファミリィキャンプ

二三日 駐車場等工事完了

九月十三日 木田百代姉召天

十一月三日 墓前礼拝と召天者合同記念会

二〇〇四年(平成十六年)

○ あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。

(第二ペテロー・十)

○ 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して

下さった。

○ わたしの愛のうちにいなさい。

(ヨハネ十五・九)

一月一〜三日 新年聖会(金生伝道師)

一月十二日 榎本百合子師記念会

二月六日 津留崎浩行兄召天

三月 教会屋根塗装工事

四月二九日 榎本利三郎師記念会

六月 牧師館改装工事

七月十二日

貞一彦兄召天

二七日

榎本和義牧師前立腺がん手術

八月十日

夏期ファミリーキャンプ

二九日

若葉会(求道者会)休止

九月九日

熊谷千代子姉召天

二七日

川越千恵子姉召天(津田キリスト教会)

十一月

伊規須富夫兄召天

十一月三日

墓前礼拝、納骨式、合同記念会

十二月五日

一年の感謝会

十九日

クリスマス礼拝、祝会

二三日

燭火礼拝

一月四〜六日

新年聖会(榎本和義牧師)

二月二十日

「礼拝の心得」配布

三月二十日

若家族会の月例化(家族会休止)

五月四日

西山公治兄・時松喜美子姉結婚

五日

福岡大濠公園教会にて

八月一日

榎本利三郎・百合子師記念会

九月

川原安子姉召天

九日

教会学校一日お楽しみ会

九月四日

花倉洋子姉召天

二五日

洗礼式(木田徳次郎兄、海江田博子姉)

二五日

福岡大濠公園教会にて

二五日

ぶどうの木三一号発行

十一月三日

召天者合同記念会

六日

小田信子姉・末弘雅章兄結婚(リーガロイヤルホテルにて)

十二月四日

一年の感謝会

(ヨハネ黙示録一・八)

○ 恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いて

はならない、わたしはあなたの神である。

(イザヤ四一・十)

○ 御霊によって歩きなさい。

(ガラテヤ五・十六)

二三日

燭火礼拝

十六日

長期療養者クリスマス訪問

十八日

クリスマス礼拝、祝会

二〇〇六年(平成十八年)

○ 見よ、わたしはすべてのものを新たにします。

(ヨハネ黙示録二一・五)

○ 栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。

(第二コリント三・十八)

○ 主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。主を待ち望め。

(詩篇二七・十四)

十一月三日 召天者記念礼拝・合同記念会

十二月 野村末義兄記念誌発行

十二月三日 一年の感謝会

八日 長期療養者クリスマス訪問

十七日 クリスマス礼拝、聖餐式、祝会

二十四日 クリスマス燭火夕拝

一月四〜六日 新年聖会(榎本和義牧師)

三月十一日 正野潔兄・篠田亜紀姉結婚式

四月十六日 イースター礼拝、聖餐式

二七日 堤善弘兄召天

五月四日 榎本利三郎・百合子師記念会

榎本利三郎・百合子師記念誌発行

六月四日 ペンテコステ礼拝、聖餐式

十一日 「日々の聖言」、「聖書からのメッセージ」を

インターネット閲覧開始

十三日 下松光子姉召天

二五日 洗礼式(林スズ子姉) 福岡大濠公園教会にて

八月 新原こい姉召天

八月十五日 教会学校一日お楽しみ会



2007年 1 月 14日

福岡大濠公園教会



2006年 クリスマス祝会
(大濠)



2006年 クリスマス祝会
(八幡)



2007年 1 月 7 日

八幡前田教会



2007年 1 月 7 日

八幡前田教会

編集後記

◎ 「ぶどうの木」第三二号をお届けします。

前回の三一号は、二〇〇五年九月発行でしたから、一年四ヶ月ぶりとなります。できれば年内に発行したいと思っておりますが、諸般の都合で遅れましたこと、お詫びいたします。

◎ 二〇〇六年は、二つの記念誌が発行されました。五月に

「榎本利三郎・百合子師記念誌」が、十一月には野村末義兄記念誌が発行されています。「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」(ヘブル十一・五)。私共の教会は、榎本利三郎先生によって拓かれ、多くの聖徒達によって証しされてきました。今、私達は記念誌を通して、その足跡から信仰を学ぶことができることは、実に大きな恵みです。

◎ 同じように、「ぶどうの木」に掲載されているお一人お一人のお証しは、単なる記録に留まらず、多くの人を励ます記念誌ではないかと思えます。

どうぞ、今後も継続して発行したいと願っておりますので、どしどし原稿をお寄せください。(S)

発行 二〇〇七年二月

発行者 福岡市中央区鳥飼二―二―二六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会
牧師 榎本和義

発行所 基督伝道隊

八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社